

た ん ざ か い せ き

反 坂 遺 跡

都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に伴う発掘調査報告書

2006年3月

島根県浜田河川総合開発事務所
江津市教育委員会

た ん ざ か い せ き

反 坂 遺 跡

都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に伴う発掘調査報告書

2006年3月

島根県浜田河川総合開発事務所
江津市教育委員会



古墓より高野寺山を望む。SE→NW



反坂遺跡出土遺物



SX01出土石塔（21・22）



SX01出土石塔（21）

序

このたび、都治川治水ダム建設事業（波積ダム）及び県道付替工事に伴い、波積町で発掘調査を行なった反坂遺跡の調査報告書を刊行する運びとなりました。

江津市北東部と大田市（旧温泉津町）の市境にあたるこの地域は旧国道（県道大田・井田・江津線）が通っており、昔から交通の要地として地域の発展に影響を与えていました。遺物の分布状況や文献から、井田地域の歴史は古墳時代に遡ることが確認されています。

今回の調査では、中世の石塔を伴う盛り土などを確認しましたが、この一帯は今でも宝篋印塔や五輪塔などの石塔が多く点在しており、その石材の多くに温泉津町の福光石と言う安山岩火碎岩が使用されている事が分かりました。現段階では福光石製品の起源は明らかになつていませんが、室町時代末期にはすでに福光石の加工品が利用されていたようで、現在でも江津市内では福光石を加工した石塔が多く存在します。

中世の石塔群は地域の交流や思想、宗教などを理解するために欠かせない文化財ですが、風化が激しく、地域で保護しながら緊急に調査を行なう必要があります。

今回の報告が江津市の古墓や石塔に対する関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたり、ご協力を頂きました地元の皆様や浜田河川総合開発事務所をはじめ、関係者の皆様方に厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月

江津市教育委員会

教育長 野 上 公 司

例 言

1. 本書は島根県浜田河川総合開発事務所が実施した都治川治水ダム建設事業（波積ダム）の県道付替工事に伴い、平成17年度に江津市教育委員会が実施した反坂遺跡の本発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は島根県浜田河川総合開発事務所の委託金を得て、江津市が実施した。

3. 発掘調査対象地は下記のとおりである。

反坂遺跡 島根県江津市波積町本郷字反坂

4. 本遺跡の調査履歴は以下のとおりである。

平成16年3月11日 分布調査

平成17年4月1日 本調査

平成16年3月19日 試掘調査

平成17年度 報告書作成

平成17年3月20日 調査区伐開

5. 調査体制は次のとおりである。

事務局 江津市教育委員会

野上 公司 教育長

林 浩司 生涯学習課長

調査担当 梅木 茂雄 同 主任主事

小林 茂雄 同 課長補佐

事務補助 福本 和世子 同 臨時職員

中西 一郎 同 課長補佐

調査補助 澤津 孝 同 臨時職員

藤岡 美津子 同 主任

無川 美和子 同 臨時職員

調査協力者

上本忠行、小川正友、郷原治、坂村昇平、主原洋子、高橋則明、植井信子、長瀬清、藤本淳子、松島真直、松原標倪、山崎加津栄、山下幸子、山田ゆう子

6. 調査及び報告書の作成に際し、次の組織、方々に指導・助言をいただいた。記して感謝する。

島根県教育委員会文化財課、同石見銀山世界遺産登録推進室、鳥谷芳雄氏、山瓶自然館サヒメル、中村唯史氏、内田安正氏

7. 報告書の作成は以下の者が携わった。(五十音順)

上野由美恵、梅木茂雄、上手文子、澤津孝、鹿森美鈴、主原洋子、福本和世子、藤本淳子、無川美和子、山田ゆう子

8. 報告書の作成は、梅木の指導の元、主に澤津が行った。

9. 第2図で使用した地図は、建設省同上地理院長の承認を得て同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号) 昭62. 中復第194号

挿図で使用した方位は測量法による第3座標系X軸方向を指し、平面直角座標系XY座標は日本測地系による。標高は海拔高を示す。

10. 本書で使用した記号は以下の通りである。

Tr:トレンチ SD:溝 SK:土坑 SX:不明遺構 KD:加工段

11. 報告書記載の遺物・図面・写真等は江津市教育委員会で保管している。

本文目次

- 第1章 遺跡の位置と環境
- 第2章 調査に至る経緯と調査概要
- 第3章 調査の成果
 - 1 古墓
 - 2 その他の遺構
 - 3 古墓に伴う遺物
 - 4 その他の遺構に伴う遺物
- 第4章 石塔について
 - 1 古墓・SX01の石塔について
 - 2 寄せ墓の石塔について
 - 3 周辺の石塔について
- 第5章 まとめ
- 参考文献

挿図目次

- 第1図 石材別石塔分類図
- 第2図 反坂遺跡周辺遺跡地図 S=1/70,000
- 第3図 反坂遺跡周辺地形図 S=1/20,000
- 第4図 反坂遺跡周辺地形図 S=1/5,000
- 第5図 反坂遺跡試掘調査トレンチ配置図 S=1/900・土層図 S=1/60
- 第6図 反坂遺跡遺構配置図及びトレンチ配置図 S=1/200
- 第7図 反坂遺跡調査区トレンチ土層図 S=1/80
- 第8図 反坂遺跡古墓調査前地形測量図・土層図 S=1/60
- 第9図 反坂遺跡古墓SK01 S=1/80・石塔下部配置図 S=1/20
- 第10図 反坂遺跡古墓完堀地形測量図・遺構配置図 S=1/60
- 第11図 反坂遺跡SX01・SX02・SX06実測図 S=1/40
- 第12図 反坂遺跡出土遺物実測図 S=1/1・1/3・1/6
- 第13図 反坂遺跡古墓・SX01石塔実測図 S=1/10
- 第14図 反坂遺跡寄せ墓石塔実測図 S=1/10
- 第15図 中世大家莊基本所領図及び地質図 S=1/100,000

表目次

- 第1表 遺跡一覧表
- 第2表 反坂遺跡遺構計測表
- 第3表 反坂遺跡石塔法量表
- 第4表 反坂遺跡山上遺物觀察表
- 第5表 反坂遺跡遺物分類表
- 第6表 地質及び岩石表
- 第7表 中世大家莊の領域とその内部単位組織表

写真図版目次

卷頭1 古墓より高野寺山を望む。SE→NW	写真9 SX01上層堆積状況 W→E
卷頭2 反坂遺跡出土遺物 SX01出土石塔 (21,22)	SX01上層堆積状況 W→E
SX01出土石塔 (21)	SX01磁器出土状況 SE→NW
写真1 高野寺山から波瀬地図を望む。(右に反坂遺跡) E→W	SX01土層堆積状況 W→E
高野寺山から反坂遺跡を望む。SE→NW	SX01上層堆積状況 W→E
写真2 反坂遺跡遠景 SE→NW	SX01完層状況 S→N
温泉津町市場から反坂遺跡 E→W	SX01完層状況 W→E
写真3 古墓調査状況 E→W	写真10 古道01・KD01完層状況 (第10回) E→W
後開後溝東西 E→W	古道01・KD01完層状況 W→E
調査前石塔配置状況 NW→SE	古道01 E→W
測量前石塔配置状況 SW→NE	N-Sセクション上層堆積状況 W→E
石塔下部配置状況 N→S	N-Sセクション土層堆積状況(第10回) W→E
写真4 Tr9北側上層堆積状況 N→S	SX05上層堆積状況 S→N
Tr9南側上層堆積状況 W→E	写真11 SX06プラン検出状況
Tr9西側土層堆積状況 W→E	SX06土層堆積状況
Tr9北側上層堆積状況 W→E	SX06完層状況
Tr11SD01 S→N	古墓完層状況 W→E
Tr11SD01 N→S	遺構完層状況 NW→SE
写真5 Tr16上層堆積状況 W→E	遺構完層状況 NE→SW
Tr12上層堆積状況 W→E	作業風景 NW→SE
Tr16堆積状況 SW→NE	現地説明会
Tr16土層堆積状況 S→N	写真12 古墓 宝篋印塔 (1・8・13・11)
Tr14上層堆積状況 S→N	古墓 宝篋印塔 (3・9)
写真6 古墓表土除去 (SK01プラン検出) NW→SE	古墓 宝篋印塔 (2・7・12)
古墓表土除去 (SK01プラン検出) NE→SW	古墓 宝篋印塔線刻マーク (2・7・12)
石塔配置状況 (第9回) N→S	写真13 古墓 五輪塔 (15・16・17・19)
石塔配置状況 (第9回) S→N	古墓 宝篋印塔相輪片 (6)
基壇検出状況 NW→SE	古墓 宝篋印塔相輪片 (5)
基壇収上げ状況 N→S	寄塚全景 W→E
SK01完層状況 NW→SE	写真14 寄塚全景 S→N
SK01完層状況 NE→SW	寄塚全景 N→S
写真7 古墓W-Eセクション上層堆積状況 (第8回) N→S	写真15 ポイントA墓地 (第4回)
古墓W-Eセクション七層堆積状況 (第8回) N→S	ポイントA寄塚 (第4回)
古墓W-Eセクション土層堆積状況 (第8回) N→S	写真16 ポイントA宝篋印塔 (第4回)
古墓N-Sセクション上層堆積状況 (第8回) W→E	ポイントA宝篋印塔 (第4回)
古墓N-Sセクション上層堆積状況 (第8回) W→E	ポイントA石仏 (第4回)
写真8 SX01検出状況 NE→SW	ポイントA五輪塔 (第4回)
SX01遺物出土状況 (第11回) W→E	
SX01相輪出土状況 (第11回) W→E	
SX01漆碗出土状況 (第11回) N→S	
SX01漆碗出土状況 (第11回) N→S	

第1章 遺跡の位置と環境

地理的環境

波積町字反坂は、江津市の北東部が温泉津町（大田市）と接する小規模な谷盆地に位置し、周りは高野寺山を始めとする200～400m級の山々によって囲まれている。反坂遺跡は下井田山南麓の山裾に位置している。菰口を始点とする都治川は、元井田・中正路で盆地を形成しながら西に流れ、波積町上本郷で深い渓谷を穿ち、落差121m、四段の岩瀧寺滝を抜けて、波積町・都治町・河戸ⁱの盆地を繋ぎ、最後は市村で江の川に合流している。井田地域を通過する旧国道（大田・井田・江津線）は県道に変更されたが、高原の平坦面を通過し、丘陵縦割りを切り通す直線道路（元井田・城郷周辺）は、今も旧国道の面影を残している。国道が壊断していた事は、昔からこの地域が交通の要地として位置づけられ、地域の発展に影響を与えていた事を意味するが、或いはもっと古い道路遺構と重複している可能性も考えられる。

反坂遺跡周辺の歴史的環境

反坂遺跡周辺で人の活動していた形跡を発見する最も古い資料は、古墳時代にさかのぼる。井田の盆地では土師器と須恵器が數十点確認されており、波積町本郷遺跡などでも都治川による沖積盆地に古墳時代の土師器、須恵器が確認されている。続く奈良平安時代の遺跡は確認されていないが、青磁や備前福鉢などの中世遺物が表采でき、また、反坂遺跡などの中世墓や寄せ墓も確認されているので中世集落の存在を容易に想定する事ができる。中世に関しては、温泉津町誌で文献資料を基に詳細が述べられているので、以下一部加筆した要約を掲載する。

温泉津町の中世は大家荘の成立から始まる。平安末から鎌倉時代初めにかけて邇摩郡の各地でも国衙領としての単位所領が発生するが、12世紀中頃に温泉津町周辺の単位所領を大家氏がまとめて代表となり、摂関家藤原（九条）氏の莊園となる。なお、大家荘の名前は安元2年（1176）が初見である。莊園の管理形態は複数の在地領主とそれらを代表する大家氏の2重構造を取っており、莊園の範囲は現在の温泉津町全域と大田市、仁摩町、江津市の一部を含む広大な領地であった。反坂遺跡のある元井田は大家荘の領地である（大家）西郷、若しくは船富に含まれていたと考えられるが船富が何處に有ったのかは不明である。

大家荘の成立により、同じく摂関家藤原（九条）氏の莊園である益田荘、長野荘と共に、邇摩郡は当時の石見で飛び抜けた勢力となる。

その後、おそらく承久の乱（1221）を契機として温泉郷を益田氏、福光郷を周布氏、佐摩郷を久利氏が所領し、西郷は福屋氏の所領となつた。鎌倉時代末期における西郷の状況は、惣領井尻氏（大家西郷惣地頭と井尻村=太田・井田・殿地域地頭）を中心に横道氏（横道村=横道・福田地域地頭）井田氏（井田地頭）尼良元氏（津瀬村地頭）となっていた。

南北朝内乱により、福屋氏の領地だった大家西郷は解体され、津瀬村（吉川氏）井田村（大家氏）井尻村（周布氏）井尻村一方（殿・太田地域、井尻若しくは吉川氏）横道村（横道・福田地域、横道氏）と、多くの諸氏により分崩領有された。

貞治5年（1366）石見国守護に就任した大内氏は、南北朝内乱終結前の永和2年（1376）、江津合戦の行なわれる直前に石見国守護職を没収されたが、その後15世紀初頭に邇摩分郡知行という形

で石見との関係を保ち、当時の石見国守護山名氏と重複する形で知行権を行使していた。しかし、大内氏は邇摩郡を見がかりに石見全域に守護以上の大きな影響を及ぼすようになり、永正14年（1517）には再び石見国守護に任じられるまでになった。この時、大内氏は分郡知行をより安定させる為に、高野寺を使って信仰面からも石見全体へ影響力を及ぼそうと動いていたようである。室町時代の邇摩郡が大内氏の分郡となつたのに伴い、井田村をはじめ、温泉津町地域に大内氏の直轄領が拡大されていったと考えられる。また、吉川氏・周布氏等の有力領主が邇摩郡内の領地を拡大し、小笠原氏が邇摩郡三原郷に進出して来たのも室町期のことであった。しかし、これとは逆に在地系領主の大家氏が所領を縮小し、また殿・太田地域の井尻氏や福光上村の福光氏など、没落していく領主も現れた。

応仁・文明の乱発生直後の文明2年（1470）に起こった大内道頓の乱を収束した益田氏は、他の国人層から一步抜きん出る事になり、石見国人扇同士の一揆結合を成立させ、その盟主となる事で以後石見国守護大内氏の下、石見国内における国人層の中心的な地位を獲得していく。

大内氏が石見国守護に任命されたことにより、前守護山名氏の代官の協力要請を受けた尼子氏は本格的な石見進出の手始めとして、天永3年（1523）那賀郡波志浦を出雲日御碕社に寄進し、翌年の日御碕社造営に際して安濃・邇摩・邑智三郡に棟別錢を賦課させており、不安定ながらも石東三郡が尼子氏の勢力下に入ったことを知らしめている。

この後、邇摩郡をめぐって繰り広げられた大内氏対尼子氏の対立は、天文年間に行なわれた石見銀山開発の進行によりますます激しさを増していく。毛利元就との総力戦で大敗を喫した尼子晴久の軍を討滅させるべく、月山富田城へ軍を進めた大内義隆はこれに敗れ、山口まで逃げ延びたが以後勢力を衰退させ、ついに天文20年（1551）陶隆房の叛逆にあって自刃した。これを以って室町期以来の長年にわたる大内氏による石見国支配、邇摩分郡知行は終わりを告げた。

この間の石見国内では、勢力の弱まった大家氏をも取り込んで小笠原氏が邇摩郡最大勢力に成長していた。佐摩村を持つ小笠原氏は、やがて大内氏や尼子氏と並んで銀山経営に参加していくことになる。

大内亡き後陶春賢は大友氏から晴英を養子に迎え、大内氏の家督を継がせて大内政権を継承しようとしたが、形だけの傀儡政権では力を持った石見国人たちの統制は不可能だった。毛利元就は陶氏を討滅後石見制圧の足がかりとして邇摩郡獲得に動き、小笠原氏への攻撃を始めた。尼子氏の援護を受けながらも小笠原氏はこれを凌げず、永禄2年（1559）毛利氏に降った。同じく尼子氏の援護を受けながら激しく毛利氏に反抗していた温泉氏だったが、協同戦線を張っていた木城氏が毛利氏の軍門に降ったためその均衡を崩し、尼子の下へ身を寄せることとなった。

これによりようやく毛利氏は石見を平定することとなり、石見銀山と温泉津湊を直轄領として、以後銀山経営を軸に安定した支配体制を整えていくこととなる。

第2章 調査に至る経緯と調査概要

平成12年1月31日、江津市教育委員会は、島根県浜田河川総合開発事務所から都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に伴い埋蔵文化財の有無及び取扱いについて照会を受けた。

平成16年3月16日に現場のお問い合わせを行い、平成16年3月19日～31日まで試掘調査を行った。事業

計画範囲内に12箇所のトレンチ（確認坑）を設定し調査を行った結果、宝篋印塔の位置する高まりが人工的な盛土であった為、遺構と認識し平成17年4月1日に契約を締結し、本調査を開始した。まず調査区内の地形測量を行い、格子状にトレンチを入れ、遺構・遺物の有無を確認した。石塔が位置する盛土には十字形にトレンチを入れ、土層・遺物を確認し、石塔を測量しながら取上げた。6月28日に地元住民及び関係者を対象に現地説明会を開き、約20人の参加者を得た。その後、SX01～06を確認し全ての遺構を完掘した後測量を行い、周辺の状況を調査し平成18年2月3日に調査を終了した。

反坂遺跡の石塔群は地元で「段原曾根山武士墓」と呼ばれており、「四国巡礼の途中で亡くなられた武士」の墓として代々近所の方が管理していた。調査後の石塔は、協議の結果元々の管理者によって移転された後、引き継ぎ管理されている。

第3章 調査の成果

1 古墓（第8図）（写真図版3・6・7・11）

山裾の先端に盛り土を持つ石塔群が確認出来た。2段に作られた盛り土の平面形は方形を呈し、周溝を伴う。盛り土の最大幅は約6mあり、高さは64cmを測る。盛土中からは近世陶磁器に混じって中世青磁片6が1点のみ出土している。盛り土を覆うように椿の木が立っている。（第8図）周溝は盛り土周辺を方形に開いている。北側と西側の周溝は良く残っているが、東側は平坦面による削平を受け、南側は丘陵の肩部に当たる為、それぞれ周溝の様子が不明瞭である。出土遺物から、周溝は18世紀頃に埋まり、明治以降掘り直されたと考えられる。表上下で、宝篋印塔（1・8・13・11・20セット）が設置されている基壇と、基壇を中心に廻る配石遺構を確認した。配石遺構の平面形は方形で、石塔、自然石、縁石などを使用して雑に組まれていた。配石遺構の南辺は宝篋印塔の基礎部や五輪塔の地輪で構成されており、元々有った配石の一部を置き換えて設置されたと考えられる。置き換えられて外された配石の一部と思われる石材が側に置かれている。盛り土の中心で円形プランを持つSK01を確認した。長径189cm、深さ30cmを測り、埋土は地山ブロックで構成されていた。埋土中から水注4が出土した。SK01を掘り下げると旧表土が薄く堆積しており、そこから陶器片7が出土した。旧表土は軟質な岩盤（いわゆる地山）で所々にカナハサリの堆積が確認出来た。岩盤と旧表土の間層が認められないことと、地山の地形が不自然に平坦だった事から岩盤は削平を受けていたことが分った。宝篋印塔周辺の表土からは相輪片が3点、陶器片、磁器片、焼瓦片などが出土した。表土から出土した相輪片1（第9図）は石塔1の破片で、石塔が配置された後に壊れ落ちたものと考えられる。盛り土上に置かれていた石塔は、宝篋印塔の相輪部6点、笠部3点、塔身部1点、基躰部4点、基壇1点と五輪塔の空風輪1点、火輪1点、水輪1点、地輪2点、計20点である。少なくとも当初は宝篋印塔が6基と五輪塔が2基以上あったと考えられる。

盛り土の構築過程及び石塔の設置順序は、まず岩盤を削平して周溝を掘り込み、表土を方形に薄く盛り、盛り土を築いた後で中央を掘り込み（SK01）、地山の土を使って埋め戻した上に基壇を掘り、その周囲を配石で囲んでいる。一度石塔を設置した後に南側の配石を移動させ、その他の石塔を並べていったようだ。基壇上の石塔は基壇と一緒に設置された可能性もある。これらの作業が連続して行われたものか、時期を経て行われたものか、調査で確認出来なかった事もあるが、基

壇上の石塔と他の石塔は設置時期が違う事がわかった。盛り土の旧表土（第8回の8層）から出土した磁器から、盛り土の築造年代は18世紀頃以降と考えられる。後述するが、石塔の時期は15世紀～16世紀頃と考えられるので、おそらくこの盛土と基壇上の石塔は別の場所から18世紀以降に移築され、後からその他の石塔を盛り土の上に寄せたのでは無いかと考える。移築前の石塔が墓石だったのか供養塔だったのか、本来盛り土の下に墓坑や埋納坑などの下部施設を伴うものだったのか、など不明な点は多いが、今回の調査では周溝を伴う盛土と石塔及び配石遺構を総称して「古墓」として扱う。

2 その他の遺構

SX01 (第11回) (写真図版8・9)

古墓の西側で検出した深い掘り込みで、平面形は上部が梢円形を呈し、20～30cm下がった所から長方形に変わる。深さは209cm、長径は181cmを測る。底部は平らで壁面は粗く工具痕が残る。壁は一部オーバーハングしている所もある。埋土は8層の堆積を境に、大きく2回に分かれて埋まっている。8層堆積以後の2層～7層までは地山の土で構成されたレンズ状堆積で、他の上が混じっていない事から短期間で埋まつたと考えられる。表土から約1m下の4・7層で磁器蓋12、磁器皿13、陶器片15、相輪21、漆碗が出土した。漆碗は高台があり、黒い漆に赤漆で絵付けが内面に施されているが、木質は残っていないので漆の部分を上ごと取り上げ写真のみ掲載した。時期は近世と思われる。9層から下は水気が多く、あまり砂粒を含まない粘土に挟まれて15～20cm間隔で腐葉土の堆積が直線的に5面確認できた。腐葉土中に松葉、松ぼっくり、椿の種、葉などが確認出来た。基本的にレンズ状堆積で、おそらく水成の堆積と思われる。空風輪22や石塔片と思われる石材が出土した。9層以下の埋土は一度掘り直された後に再び堆積が続き、8層の埋土上で一気に埋没した後で7層以上の堆積が始まったと思われる。古墓の盛土8層とSX01の4層から出土した唐津焼刷毛目鉢15は接合関係にある同一個体で、SX01の2度目の埋没が進行した時期と古墓の盛り土が作られた（移築された）時期は共に18世紀頃以降と思われる。SX01が何のために空けられたのか不明だが、移築前の古墓に伴う坑の可能性が考えられる。完掘後の穴には常に雨水が溜まっていたので、貯水坑として使われていた可能性も考えられる。

SX02・03・04 (第10回) (写真図版11)

古墓の北側で表土除去後、長方形の布掘り土坑を3基確認した。SX02・03は南北方向に軸を取って平行に並んでおり、土坑中に鉄線を巻かれた2本の柱が直立していた。SX04は東西方向に軸を取っており、土坑中に鉄線で横木と結ばれた1本の柱が直立していた。SX02・03から近代の磁器碗が出土している。聞き取り調査で古墓の北隣に戦時中の火の見櫓が建っていたと聞いており、遺構の場所、遺物の時期も一致する為、火の見櫓の基礎ではないかと考える。

SX05 (第11回) (写真図版10)

古墓の西南側の斜面で検出した。平面形は梢円形、深さ11cmである。遺物は磁器碗19が出土している。遺物から19世紀以降に廃棄された上坑と考える。性格は不明である。

SX06 (第11回) (写真図版11)

古墓の北側で検出した。平面形は梢円形、深さは60cmで垂直に掘り込まれている。遺物は出土していない。古墓の移転前の土坑の可能性も考えられるが、性格は不明である。

KD01 (第10図) (写真図版10)

古墓の南西の斜面に加工段があるが性格は不明である。遺物は出土していない。

古道01 (第10図) (写真図版10)

古墓南側の斜面で検出した。道は中央が少し窪む。丘陵下から古墓に向かっている事から、古墓に行く為に使用された道だと思われる。遺物は出土していない。

SD01 (第6・7図) (写真図版4)

調査区北側の一段下がっている旧畠の平坦面に、地山を掘り込んだ溝状造構を確認した。深さ24cm程の溝は南北方向に延びており、やや北側に傾斜している。埋土は旧表土が堆積した後、地山ブロックを含む茶色粘質土が堆積する。5層は石など多く含み土は絞まっている為、暗渠状の性質を持つと考える。5層からは煙瓦、灯明皿が出土した。時期は19世紀以降と思われる。聞き取り調査で、この掘の土には保水性がないため北側の貯水池から水を引いていたと聞いており、畠の導水路の可能性が考えられる。

調査区の土層について (第7図) (写真図版4・5)

頂上部の表土下は直ぐ地山が広がる。南北の斜面沿いには表土と地山が交互に堆積しており、造成により平坦面を確保していた事が確認できた。北側の斜面で地山ブロックの堆積が最大厚で120cm程確認出来た (第6図A-A'セクション)。南側は表土と地山が交互に堆積しており、3・4層で石垣と思われる石組が確認できた。石は雜に2~3段積まれていた。

3 古墓に伴う遺物 (第12図)

4は盛り土の8層から出土した。染付磁器の注水である。時期は18世紀頃と思われる。7は盛土の10層から出土した肥前系と思われる壺の胸部で外面に格子目叩きが入る。時期は18世紀頃と思われる。6は盛土中から出土した貿易輸入陶磁器の青磁塊で、釉薬は緑黄色、断面は淡灰色である。時期は14~15世紀頃と思われる。5は古墓の周溝から出土した。肥前系の青磁塊と思われる。口縁内側には四方擗が絵付けされており、時期は18世紀頃と思われる。20は古墓中央の表土下から出土した焼しの棟瓦である。時期は19世紀頃と思われる。21は古墓の旧表土から出土した焼しの棟瓦である。表には工具によるタタキ・ナデの痕が確認できる。

4 その他の遺構に伴う遺物 (第12図)

第12図の12~17・22はSX01から出土した遺物で、15は肥前系陶器の鉢と思われる。口縁は無釉で内外面に刷毛目が施されている。4層から出土しており、時期は18~19世紀と思われる。14は肥前系の陶器甕で頸部の辺りに接合痕が確認できる。外面は回転ナデ、内面に格子目叩きが入る。釉薬は上灰釉と思われる。時期は18世紀頃と思われる。16は石見焼きの土鍋底部である。釉薬は来待釉で底面部外面には施釉しない。底部にススが付着していた。2度目の堆積中から出土した。時期は19~20世紀頃と思われる。17は瓦質の火鉢である。胴部外面に菊花文がスタンプされており、上部には12mm程の穴が外側から穿孔されている。2度目の堆積層中の遺物で、時期は18世紀頃と思われる。12・13は4層から出土した遺物で、13は肥前系の染付け皿である。内側には二重斜格子文が絵付けされ、見込みには蛇の目剥ぎ、高台の釉はケズリ取られ部分的に砂目が残る。12は肥前系の染付け蓋で見込みに輪花、五弁花、高台には二重方形枠渦福文、外面には松竹梅が絵付けされてい

た。高台の釉はケズリ取られ、部分的に砂目が残る。時期は共に1700～1780年代である。22は1度目の堆積土中で出土した焼し桟瓦である。表側は工具による叩き・ナデ痕跡が確認できる。時期は19世紀頃と思われる。

18はSX03から出土した石見焼きの壺又は甕である。全面に米待釉が施釉されている。口縁は内側に少しつまみ出されている。時期は19～20世紀と思われる。

19はSX05から出土した肥前系の染付け碗で、外面に草と思われる文様が絵付けされている。見込みには砂止め痕が残る。口縁は外側につまみ出し端部は搔き取り無釉である。時期は18～19世紀頃と思われる。

第12図の8～11は、調査区内の各トレンチから出土した遺物である。8は肥前系の小皿と思われ、外面に梅と思われる絵付けが施されている。トレンチ1南側斜面の3層から出土しており、時期は18世紀頃と思われる。9は肥前系の陶胎染付け碗で、外面に草文が絵付けされ外面の所々にピンホールが見られる。高台の釉薬はケズリ取られている。トレンチ2の2層から出土している。11は土師器の小皿で底部に糸切り痕が確認できる。内面にススが付着している為、灯明皿と思われる。トレンチ2北側の地山直上から出土しており、時期は18世紀頃と思われる。10は肥前系陶器の壺又は徳利と思われる。外面には白色の釉が線状に4周回っている。内面は無釉で高台中心に釉薬の降物が掛かった痕跡がある。トレンチ2南側の地山直上で出土している。時期は18世紀頃と思われる。

試掘調査の遺物（第4・12図）

1は古墓東側にある大田・井田・江津線北側の休耕田で表探した。サヌカイトの石器で片側に加工痕がある。時期は縄文時代～弥生時代と思われる。2・3は古墓の東側に広がっている田面で表探した備前焼の擂鉢である。2は口縁の形態から室町時代頃と思われる。3はすり鉢の底部片で内側には7条の櫛目が残る。使用により櫛目が消え滑らかである。時期は中世と思われる。

第4章 石塔について

1 古墓・SX01の石塔について

宝篋印塔（第13図）（写真団版12・13）

相輪

1の下請花は素面である。九輪は線刻で表わされている。柄は円形でノミ痕が荒く残る。他の石塔と比べると全体的に大きい。2の上請花は素面で九輪を線刻で表わしている。伏鉢に「一」記号が線刻されている。宝珠は先が三角形に尖り、4・6の宝珠と比べると角張った印象を受ける。柄の断面は梢円形である。3の下請花断面は8角形で錦蓮弁が8葉あり、蓮弁の間に陵線が入る。九輪は線刻で表わされている。柄の断面は円形である。4の宝珠には2本の稜線が入り丸みを帯びている。上請花は素面である。5・6は上請花に複弁と間弁がそれぞれ4葉表されている。6は5より深く請花を彫っており立体的に表現されている。5の宝珠は上請花より大きく6の宝珠は上請花より小さい。21は下請花の断面が8角形で、錦蓮弁は8葉あり蓮弁の間に稜線が入る。九輪を深い線刻で表現している。柄の断面は円形である。SX01から出土している。

笠

7・8・9の隅飾形態を見ると7・9は内側の段が無く外辺がやや外反する。8は内側に段を持

ち、やや外反する。上段形の傾斜はいずれも直立である。8は隅脚突起と軒の間に境が無く簡素な感じを受ける。下段形を見ると、9は一段で他は2段である。7は軒に「+」記号が線刻されている。これは「-」記号と併に、石塔を組み合わせる時の正面をそろえる為、背後に施したと考える。共に納穴の内側に粗い加工痕が残っている。

塔身

10は塔身と思われるが五輪塔の地輪の可能性もある。正方形を呈し、素面である。割り込みなどは見られない。

基礎

14は階段状の段が一段で上部に雀みがある。雀みは舍利などを入れる納入孔と考えられる。11・12・13の階段状の段は2段で表現しており、段の高さに変化がある。11は高い段と低い段が付く。12は低い段を持つ。13は高い段を持つ。12の基礎上部側面には「+」記号が線刻されている。

基壇

基壇20は粘板岩系の石である。縦横約60cmの正方形で荒く加工されている。厚さは約13.5cm。一部欠損している。

五輪塔（第13図）（写真図版13）

空風輪

15は空風輪の断面が共に梢円形で、空輪が大きく風輪は小さい。梢の断面は円形である。22の断面は空風輪共に梢円形である。空輪は大きく風輪は小さい。梢の断面形は梢円形である。SX01から出土した。15・22は空輪と風輪の間を線刻で表わさず、丁寧に彫っているのが印象的である。

火輪

16は軒が厚く隅は緩やかに反る。納穴の平面形は円形である。

水輪

17は上部に平面形が四角形を呈する穴が丁寧に彫られており舍利納入孔の可能性が考えられる。下部は少し窪んでいる。高さ10cm、幅21cmで全体的に扁平である。

地輪

18は上部に円形の穴が丁寧に彫られている。19は上部の穴が方形で浅く丁寧に彫られている。18に比べると全体的に小さい。

2 寄墓の石塔について（第14図）（写真図版13・14）

調査区南東の道端に確認できるだけでも約35個の石塔が集められている。まだ土に埋もれている石塔も多くあると思われる（第4図）。聞き取り調査によると、元々の出土場所は第4図Cのポイントで「山崩れにより田に土砂と一緒に石塔も流れた為、近くで石塔が集まっている所に移動した。」という事が分った。元々石塔の集まっていた所に他の石塔も周辺から集められた様である。今回の調査では表出している石塔のみを実測し掲載した。

宝篋印塔

相輪

23の宝珠は先細り、上請花・下請花は素面で九輪を線刻で表現している。梢の断面形は梢円形で

ある。24の宝珠は鰐頭形で九輪は線刻で表されている。上請花は素面である。伏鉢に「+」記号が線刻されている。25・26の宝珠は鰐頭形を呈し、上請花は素面で九輪を線刻で表わしている。27・29・30の宝珠と上請花の境を見ると、断面が三角形を呈す。上請花は素面である。31・32は下請花が8角形で鎧蓮弁は8葉である。蓮弁の間に稜線は無い。九輪は線刻で表わしている。衲形は断面円形である。33の九輪は線刻で表わしている。九輪と伏鉢の間に算盤玉状の突帯が廻る。伏鉢に「-」記号が線刻されている。28の九輪は線刻で表わしている。九輪の径は大きい。

笠

34の隅飾突起はやや外傾している。下部の段形は2段あり、軒には「-」記号が線刻されている。納穴は円形である。35の隅飾突起は外反し、上段輪が広く、上段平面形は隅丸方形である。軒には「+」記号が線刻されている。軒下には蓮弁が彫られている。納穴は円形で大きい。36の隅飾突起は垂直気味で軒が厚い。納穴の平面形は隅丸方形である。37・38・39・40は隅飾突起の内側に段が付く。38の外辺は垂直気味に立ち上がり、その他の外辺は外反する。隅飾突起と軒の間には境が無く簡素な感じである。下部の段形は一段である。納穴形は円形で37・40の納穴は浅い。41の軒は段が無く、隅飾には縁取りの沈線が入る。

塔身

42は上下に円形の突起状の衲があり、笠と基礎の納穴に差し込むものと思われる。これと同様の塔身が宍道町岩屋寺の宝篋印塔・能義郡広瀬町東比田の経負坂古墳群の宝篋印塔などに見られる。

基礎

43は反花座に間弁があり、蓮弁の彫りはやや丸い。側面の4面に格座間を簡略化したと思われる枠を四角い線で表わしている。上面に梢円形の穴があり舍利納入孔と考えられる、下面にも窪みがある。上下の穴は共に粗い加工痕が残る。44・45・46は上段があり、44・46は2段、45は1段で全体的に小さい。44・45は階段形が低い。

五輪塔

空風輪

47・48・49は空輪と風輪の境界が断面三角形の溝で表わされている。47は空輪の断面が梢円形で大きく、風輪は梢円形で小さい。衲の断面は四角形である。48・49と比べて全体的に大きい。48は空輪と風輪の高さが違い、風輪の方が高く作られている。衲の断面は梢円形である。49の衲断面は梢円形である。

火輪

50は軒の反りが強く、全体的に高さがある。衲穴形は梢円形である。51は軒の隅が若干反っており、全体的に扁平な造りである。衲穴形は梢円形である。

水輪

52は高さがあり、側面はゆるやかに膨らむ感じで中央に稜線が入る。上部が梢円形に浅く彫り込まれている。53は側面がやや強く膨らむ感じで扁平である。上部の中心は四角形に彫り込まれている。下部も少し彫り窪んでいる。

地輪

54は全体的に継長で、舍利の納入孔と思われる窪みがある。風化の為磨滅している。宝篋印塔の

塔身の可能性もある。55は磨滅している。上部の穴は梢円形である。地輪として報告するが火輪や宝篋印塔の塔身の可能性もある。56は正四角形である。上部の穴は四角形で舍利納人孔と思われる。

3 周辺の石塔について（第4図）（写真図版15・16）

Aのポイントにある石塔群は写真のみ掲載した。写真図版15は墓地の東側に石塔片が無数に寄せ集められている。推定20基分位あり、石塔の時期幅もある。写真図版16は板状の石塚上に宝篋印塔が設置されている。この他に4基の宝篋印塔があり、全て石見銀山周辺でよく見られるタイプの宝篋印塔であった。年代は1600～1700年頃と思われる。写真図版16の石塔は塔高90cmで台の高さ50cm、幅80cm、奥行90cmの石組の上に設置されている。この五輪塔の地輪部分は宝篋印塔の基礎を使用している。写真図版16は地蔵で「享保十巴十月七日」「涙清淨智信尼」と記されている。角石で台を作っている。この墓地には地蔵も多くあるが、銘が分るのはこの地蔵のみである。

Bのポイントは地元で「羽出場上山武士墓」と称して祀っている。宝篋印塔の笠が4点、火輪が1点、空輪が1点、基壇が3点確認できた。

第5章 まとめ

今回の調査では、古墓の盛土上の時期と設置されていた石塔の時期にずれがある為、この古墓が18世紀以降に他所から移築されたことが分った。古墓の盛土とSX01の遺物に同一個体のものがあり、盛土の作られた時期とSX01が半ばまで埋もれた時期が近いのではないかと考えられる。

今回調査された宝篋印塔は形式的に石見銀山で一般的に見られる宝篋印塔と共通する特徴を持つており、石見銀山の宝篋印塔より古い可能性があると島谷氏からご教授頂いた。従って、今回調査された石塔の時期の下限は16世紀末から17世紀初頭辺りに仮定しておく。また、調査で確認できた中世の遺物の時期が15世紀から16世紀に収まる為、今回の調査で確認された石塔の時期の上限を15世紀から16世紀ごろと仮定しておく。石塔の正確な時期は今後の調査により検証していかたい。

今回の調査で、石塔ごとに石材が違う事に気付いたので、その特徴を以下に述べる。資料数の少ない現時点での具体的なことは言えないが、今後の調査の方向付けは出来たのではないかと考える。

石塔の材質については、石塔20点ほどを中村唯史氏に鑑定していただき、石材の特徴についてご教授頂いた上で、その他の石材について梅木・澤津が分類した。

石材の違いによる石塔の特徴について（第1図、第15図）

石材

今回の石塔調査で確認できた石材は大きく4種類に分かれた。以下石材の特徴を簡単に記す。なお、調査区周辺の石材の産地について中村唯史氏の指導に基づき第15図を作成した。

石材A（在地若しくは搬入品の砂岩）黄色を呈す。製品の数が少なく搬入品の可能性がある。石材の産地が在地（温泉津町周辺）なら、久利脣の分布するエリアに点在している川合層に含まれる凝灰岩～凝灰岩質砂岩の可能性がある。

石材B（在地若しくは搬入品の貫入岩）黒色を呈す。製品は石材の組成に粗密があり、見た目の印象にばらつきがある。石材が搬入品ならば日引石の可能性もある。

石材C（大江高山火山噴出物）灰色から桃色を呈す。

石材D（久利層）多くが緑色を呈す。いわゆる福光石を含む層である。今回の石塔に使用されている石材はいわゆる福光石と思われるが、石材の組成に粗密がある。将来的に石材の品質の違いにより石塔の種類を細分できる可能性がある。今回は組成の粗い物を石材D' として図示しているが、記述では石材Dの範疇として扱う。

石塔の特徴

石塔の各部分における特徴を石材ごとに述べる。

宝鏡印塔

相輪部

石材Bは宝珠に稜線が1本入り、彫りの深い蓮弁と間弁が付く。石材Cは、宝珠に稜線が2本入り丸みを帯びているものと、稜線が1本で頂部が先細るものがあり、上請花に蓮弁を付けない。九輪以下を見てみると、九輪の断面が突帯状にしっかりと彫り込まれており、下請花に鏽蓮弁が付き、間弁代わりの稜線が入るものと、九輪の彫り込みが沈線状に浅く入り、下請花が高く、鏽連弁が付くが間弁が完全に省略されているもの、下請花に蓮弁が付かず伏鉢となり、その上部に突帯の廻るものがある。今回の調査では上請花に蓮弁の付く物は認められなかつたが、現時点での存在を否定することは出来ない。石材Dは宝珠に稜線が1本入り、頂部の丸いものと先細るものがある。上請花に蓮弁は無く、突帯状になるものがある。九輪は浅い沈線で表され、下請花の蓮弁も無く伏鉢となる。その上部に突帯の廻るものがある。九輪と伏鉢を一連のものとして作成しているものもある。伏鉢に「-」「+」記号を刻むものも有るが石材D' には見られない。

笠部

石材Aの隅飾りは外反せず、隅飾り突起内側の輪郭を浅い沈線で表現し、下段形が1段付く。石材Cの隅飾りは外反しないものと外反するもの有り、内側の輪郭は表現せず、下段形を1段付ける。下段形は1段だが、大型のものは2段付く。軒の表現は無い。石材Dの隅飾りは直立傾向のものと外反するものがあり、内側の輪郭は表現せず段を持たない。隅飾り内側の幅が広いもの有る。上段形は直立するが大型のものは斜立する。軒を沈線で表すものと、凸形に削りだすものがある。軒幅は広いものと狭いものが見られる。軒に「-」「+」記号を刻むものがあるが石材D' には見られない。下段形は1段のものと2段のもの、反花座が付くものがある。反花座がつくものは隅飾り間が広い。**35**は石見銀山で多く見られる笠部の形態に酷似している。

塔身部

石材Bの塔身は小型で上下にドーム形をした稍状の突起を持つ。石材Dの塔身はほぼ正方形で、削り込みなどの加工は見られない。ちなみに、今回五輪塔の地輪として報告したものの中に宝鏡印塔の塔身が含まれている可能性が高いが、明確に分類できなかつた為、一応地輪として扱っている。

基礎部

石材Bの上段は1段で柄穴が空く。反花座はしっかりと彫り込まれており、格座間は輪郭のみを四角い沈線で表現している。蓮弁は間弁を若干省略し、蓮弁の彫りはかなり平らである。底部内面に削り込みが見られる。石材Cの上段は1段のものと2段のものが有り、1段のものに突起受け若しくは含利穴が空く。反花座及び格座間は無く、大型のものは若干台形状を呈す。また、扁平気味

のものも有る。石材Dの上段は2段で削り込みなどの加工は見られない。上部に「+」記号を刻むものが認められる。正方形のものと扁平気味のものが有る。

五輪塔

空風輪

石材Cの空輪は稜線が2本入り頂部は先細る。風輪の縦断面が逆台形を呈し、空輪との接点近くに稜線が入る。空輪に比して風輪の大きさが小さいものとほぼ等しいものがある。石材Dの空輪は稜線が1本入り、頂部が丸みを帯びるものと先細るもののが見られる。風輪は縦断面が逆台形だが、縦断面が方形気味で、空輪との接点付近の稜線が下がるものがある。空輪に比して風輪の大きさが小さいものと、さらに小さいものがある。

火輪

石材Cは背が高く、軒は深く反っている。石材Dは、若干背が低いものと扁平のものが有る。軒の反りが甘い。

水輪

石材Cの水輪は若干背が高く上部に削り込みがある。石材Dの水輪は扁平で上下に削り込みを持つ。地輪

今回の調査では宝篋印塔の塔身と地輪の判別が不確定だった為、宝篋印塔の塔身と思われるものも一応こちらで扱った。石材C、D共に片面に削り込みを持つ。

以上、ざっと石塔の特徴を石材ごとに並べてみたが、資料数が少ないながらも凡そ石材ごとに特徴がまとまっており、形式的に石材A・B⇒石材C⇒石材D（D'が先行か？）という流れが読み取れそうである。石材Cの中には、石材D'の特徴が先行して表れているものもあり、五輪塔の形式変化も石材Cから石材Dへ追えるようなので、石材C⇒石材Dという流れは概ね間違いないのではないかと考える。石材Dには石見銀山で一般的に確認されている宝篋印塔に酷似した特徴が見られるため、石材Dの石塔から石見銀山で普通に見られる宝篋印塔へ移行していく可能性が考えられる。石見銀山で普通見られる宝篋印塔は市内では第4図のAポイントや江川以西でも確認されている。今後の資料の増加により、編年の作成も可能になると思われる。

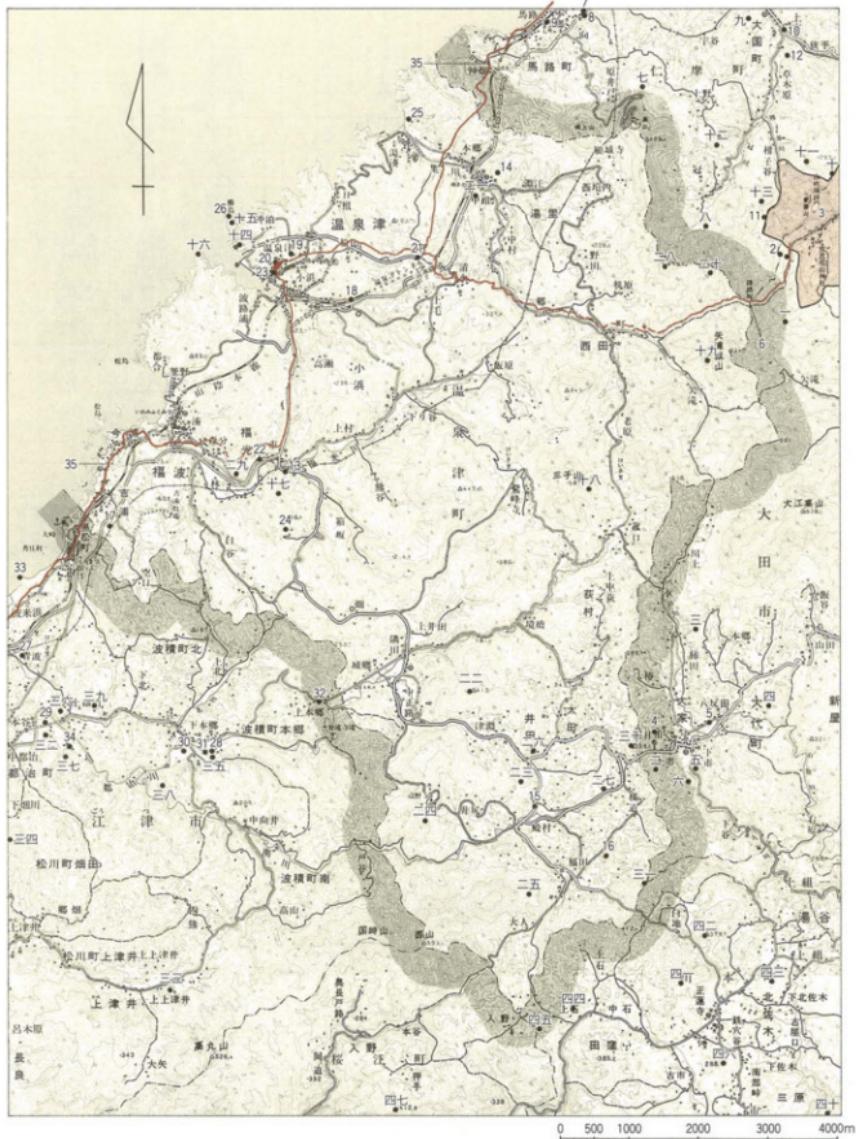
文献から、この土地が歴史的に周辺地域への影響力をもっていたことが窺われるため、大家氏や大内氏、毛利氏などの動向と、石塔制作地の変遷を連動させて考えれば、石塔の流通を通じてより深く地域を理解することが出来ると考える。

参考文献

No.	著者	発行日	タイトル
1	杉原清一	1988年	詳細分布調査『丸子山城跡・福富城跡・佐世城跡』大東町教育委員会
2	今岡稔	1989年	『山陰の石塔二三について』村谷智郎郡本町の石造美術『鳥根考古学会誌』第6集鳥根県考古学会
3	杉原清一	1990年	『大東町の遺跡II - 大東・瀬瀬 - 』大東町教育委員会
4	杉原清一	1990年	『加茂町の遺跡 - 赤川以南 - 』加茂町教育委員会
5	今岡稔	1991年	『山陰の石塔二三について - 2 - 』『鳥根考古学会誌』第8集鳥根県考古学会
6	今岡稔	1991年	『加茂町の遺跡 - 赤川以北 - 』加茂町教育委員会
7	今岡稔	1992年	『上久々茂土居遺跡周辺の石塔等について』『上久々茂土居跡』鳥根県教育委員会
8	杉原清一	1993年	『大東町の遺跡V - 篠路 - 墓田一 - 』大東町教育委員会
9	今岡稔	1994年	『山陰の石塔二三について - 3 - 』『鳥根考古学会誌』第11集鳥根県考古学会
10	今岡稔	1995年	『山陰の石塔二三について - 4 - 』『鳥根考古学会誌』第12集鳥根県考古学会
11	今岡稔	1996年	『山陰の石塔二三について - 5 - 』『鳥根考古学会誌』第13集鳥根県考古学会
12	今岡稔	1997年	『山陰の石塔二三について - 6 - 』『鳥根考古学会誌』第14集鳥根県考古学会
13	今岡稔	1998年	『山陰の石塔二三について - 7 - 』『鳥根考古学会誌』第15集鳥根県考古学会
14	今岡稔	1999年	『山陰の石塔二三について - 8 - 』『鳥根考古学会誌』第16集鳥根県考古学会
15	今岡稔	2000年	『山陰の石塔二三について - 9 - 』『鳥根考古学会誌』第17集鳥根県考古学会
16	今岡稔	2001年	『鳥島の中世石造物についての考察 ~ 日引石製品を中心に ~ 』『鳥根考古学誌』第18集鳥根考古学会
17	今岡利江	2001年	5万分の1地質図幅『温泉津及び江津』、地質調査所
18	鹿野和彦・宝田晋治・牧本博・土谷信一・豊満秋	2002年	『山陰の石塔二三について - 10 - 』『鳥根考古学会誌』第19集鳥根考古学会
19	今岡稔・今岡利江	2002年	『川原の石造り回廊』
20	木原光・長澤和章	2003年	『市内遺跡発掘調査報告書I』(七尾城跡・三宅御土居跡・沖手遺跡・中井石造物分布調査) 益田市教育委員会
21	綾田浩毅	2004年	『地球科学小論』地盤は火山がつくった
22	伊藤菊之輔	1968年12月	『石見の石造美術』報光社
23	山本東太郎	1971年11月	『江津市の地誌』江津市文化財研究会
24	齊藤忠	1977年12月	『日本古小辞典』県屋・近松出版社
25	28	1986年6月	『鳥根県地学会会誌』創刊号(第1号)『鳥根県地学会会誌編集委員会・谷口修郎・木谷石塔発掘調査報告書』鳥根県邑智郡川本町教育委員会
26	今岡稔・三宅博士	1987年3月	『高屋ヶ丘古墳群』五代・上古墓』那賀郡三瓶町教育委員会
27	宮本道昭・仲田敏廣・三浦博道	1989年3月	『風土記の地内古遺跡発掘調査報告書VI - 茂山白山城跡・内船石塔群 - 』鳥根県教育委員会
28	馬谷芳雄	1990年3月	『川原城跡古墳群集シリーズ(2)「佛教石造物 江津市 - 五輪塔源・宝鏡印塔」を主とした石造塔探訪』
29	平田正典	1992年9月	『「宝鏡山(溫泉津御)」の岩は寶鏡石?』『鳥根県地学会会誌 第8号』鳥根県地学会会誌編集委員会
30	渡辺農	1993年3月	『「宝鏡山(溫泉津御)」の岩は寶鏡石?』『鳥根県地学会会誌 第8号』鳥根県地学会会誌編集委員会
31	井上賣司他	1994年8月	『温泉津御』上巻・温泉津御石誌編さん委員会
32	35	1995年9月	『温泉津御』中巻・温泉津御石誌編さん委員会
33	宇野泰光	1997年3月	『鳥根県大河・邑智地域の鮮新 - 更新世末野尻津群群、水上層の層序と層相』『鳥根県地学会会誌 第12号』鳥根県地学会会誌編集委員会
34	37	1998年3月	『清水大日堂裏古墓発掘調査報告書』安来市教育委員会
35	間野大添	1998年7月	『中世石造物の調査方法について - 五輪塔・宝鏡印塔を中心に - 』『来得ストーン研究』モニュメント・ミュージアム来得ストーン
36	間野大添	2000年10月	『宝鏡印塔所在の年銘のある宝鏡印塔について』『来得ストーン研究』モニュメント・ミュージアム来得ストーン
37	38	2001年3月	『田中義昭・池上悟・鳥谷芳雄・逸藤浩一・大森義・石原聰・一瀬一浩・中田健一・松尾充昌・守岡正司・舟木重』『経負坂古墳群』広瀬町教育委員会
38	40	2002年3月	『向田遺跡II』財团法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
39	41	2002年3月	『電王南遺跡』財团法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
40	42	2002年3月	『電王南遺跡』財团法人山口県教育財団 山口県埋蔵文化財センター
41	43	2003年3月	『石見銀山『妙正寺跡』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
42	44	2004年3月	『田中義昭・池上悟・鳥谷芳雄・守岡正司・舟木重』『長興寺跡・安養寺跡・大安寺跡・大觀寺跡・奉行代官墓所外』鳥根県埋蔵文化財センター
43	45	2004年3月	『田中義昭・池上悟・中田健一・鳥谷芳雄・守岡正司・舟木重』『長興寺跡・石見銀山山地役人墓地(河戸家・室家家)』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
44	46	2005年3月	『田中義昭・池上悟・内田勇樹・大和田謙・一瀬一浩・阿部有花・中田健一・守岡正司・松岡奏奉』『石見銀山『鷹昌寺跡』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
45	47	2005年8月	『「玄蕃御門王墓宝塚殷印塔について」『来得ストーン研究4』モニュメント・ミュージアム来得ストーン
46	48	2005年3月	『石見銀山『安養寺跡・大安寺跡・大觀寺跡・奉行代官墓所外』鳥根県埋蔵文化財センター・大田市教育委員会
47	49	2005年3月	『石見銀山『長興寺跡・石見銀山山地役人墓地(河戸家・室家家)』鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
48	50	2005年3月	『石見銀山『谷五輪塔』八雲町教育委員会
49	51	2005年3月	『石見銀山山地跡石造物調査報告書5』(分布調査と墓石調査の結果)鳥根県教育委員会・大田市教育委員会
50	52	2005年3月	『文化財編』『桔木村志』
51	53	2005年8月	『中世墓資料集成 - 中國編 - 』中世墓資料集成研究会

	石材B	石材C	石材D
相輪		21 3 31 32	28 24
	6 4 30 29		
	5 27 26 25 1		
			石材D' 23 33 2
宝瓶印塔	41 石材A	38 39 37	36 9 石材D'
		40 8	7 34 35
塔身	42		10
基礎	43	45 14 46 13 11	12 44
空瓶輪		47 48 49	15 22
火輪		50	16 51
水輪		52	石材D' 53 17
地輪		55 56	18 石材D' 19 54

第1図 石材別石塔分類図



第2図 反坂遺跡周辺遺跡地図 (S=1/70,000)

第1表 遺跡一覧表

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
1	上徳寺跡	寺院跡	大森 銀山		
2	上徳寺墓地	墓地	大森 銀山		
3	石見銀山		大森 銀山	銀山坑跡・寺院跡・古墓・集落跡・城跡・神社・馬場跡・番所跡・吹屋跡・民家・屋敷跡	国指定・国指定地内・県指定
4	大瀬新や煙浦跡	散布地	大代 大家	須恵器片	
5	大瀬新反田遺跡	祭祀遺跡	大代 大家	土師器、須恵器、祭祀用土製品、滑石製品	
6	銀山街道	街道跡		近世衛生跡	
7	鳥居原遺跡	散布地	馬路 鳥居原	鰐文土器、石斧、石器、石疊	
8	鳥居原古橋	古橋	馬路 鳥居原	双龍埋頭大刀、馬具、須恵器、玉頭	消滅
9	琴平古塗	古塗	馬路		
10	大國の遠標	道標	大國 上市		
11	葉筋廻の墓	古墓	大國 佐子谷		
12	坊追越六墓	横穴	大國 坊追		
13	傍岩寺遺跡	寺院跡	福波 福光	石壇の一部残存	
14	温泉新兵衛の墓	古墳	湯尾 中組		
15	中井遺跡		井田 銀山	山城	
16	柳川遺跡	散布地	井田 福田	山城	
17	正の田遺跡	散布地	福波 吉浦	須恵器	
18	仮屋敷跡	散布地	温泉津 小浜	須恵器	
19	海藏寺跡	寺院跡	温泉津 泉町		
20	愛宕神社跡	神社跡	温泉津 本町		
21	松山の道標	道標	温泉津 松山		
22	林の遺標	道標	福波 福光 林		
23	石見銀山銀温泉津船表御所跡	役所跡	温泉津 本町		
24	福光石切場跡	採石跡	福波 福光	露天掘り跡	
25	川の遺跡	散布地	湯里 温泉津 川向	磨製石斧6点	
26	沖泊港	港湾跡		島根若狭か	国指定
27	波来浜遺跡	墳墓群	後地 波来浜	A区・列石墓6基、B区・列石墓7基、火葬場2基、弥生土器、土師器、製埴土器、須恵器、陶磁器、石斧、鐵器他	
28	二川遺跡	散布地	波積町 本郷	須恵器片、土師器片	
29	宇都野吉氏宅付近遺跡	散布地	都治 上郡治	石斧、弥生土器	
30	神田遺跡	散布地	波積町 本郷	須恵器	
31	本郷遺跡	散布地	波積町 本郷	須恵器	
32	反坂遺跡	古墓	波積町 本郷字反坂	宝鏡印塔・五輪塔・陶磁器	
33	波来浜大火矢	箭跡	後地 波来浜		
34	高津遺跡	集落跡	都治町	竪穴式住居跡、掘立柱建物跡、水場遺構、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、木製品、鬼瓦式等	
35	山陰道	街道跡		近世衛生跡	
一	高城跡	城跡	水上・祖母	山城	
二	大曾山城跡	城跡	大代 大家	山城、焼米	
三	天神城跡	城跡	大代 新盛	燒米	
四	押田城跡	城跡	大代 大家	郭、腰郭	
五	万葉山城跡	城跡	大代 大家	郭、郭、腰郭	
六	麗雲山城跡	城跡	大代 大家	郭、腰郭、土壁、堀切	
七	乙見城跡	城跡	馬路		
八	綱ノ城跡	城跡	大國	山城、塹	
九	茶臼山城跡	城跡	大國 上市	山城	
十	上野ノ城跡	城跡	大國・大森 銀山	郭、腰郭	
十一	草平城跡	城跡	大國	郭、石垣	
十二	一夜城跡	城跡	大國	郭	
十三	平岡城跡	城跡	大國	郭	
十四	鶴丸城跡	城跡	温泉津	山城、塹	鶴丸城跡、国指定
十五	柳島城跡	城跡	温泉津	山城	柳島城跡、国指定
十六	譽賀城跡	城跡	温泉津 小浜	山城	
十七	物不寄城跡	城跡	福波 谷山	山城、石垣、廻井戸	不寄城跡
十八	三ノ山城跡	城跡	井田 斎村	山城、焼米	
十九	矢瀬城跡	城跡	湯里 西田	山城、塹	
二十	前矢瀬城跡	城跡	湯里 西田	山城	
二十一	溫泉城跡	城跡	湯里 西ノ夷	山城	
二十二	井田城跡	城跡	井田	山城、井戸、焼米	
二十三	殿村城跡	城跡	井田 銀山	山城	高望城跡
二十四	大島城跡	城跡	井田 井尻	山城	
二十五	更喜山城跡	城跡	井田 福田	山城	
二六	御神山城跡	城跡	井田 太田	山城	
二七	猪名城跡	城跡	井田 横道	山城	岳城跡
二八	矢若城跡	城跡	湯里 大國	郭、土塁、石垣、堀切、堅堀、虎口	矢若城跡?
二九	妙見山城跡	城跡	福光	郭、腰郭、腰郭、土塁、堀切	
三十	蓬寺山城跡	城跡	井田・大代 大家	郭	大東山城跡

番号	名称	種別	所在地	概要	備考
三一	赤城跡	城跡	井田・大代・下谷・田豫	郭、脇郭、土塁	
三二	埋森遺跡	城跡	都治・上都治	山城	
三三	林城跡	城跡	松川町 上津井		
三四	高畠城跡	城跡	松川町 畑田 下畠村		
三五	岳谷城跡	城跡	渡横町 本郷		
三六	森の城跡	城跡	都治・下都治		
三七	田中城跡	城跡	都治・下都治		
三八	利光城跡	城跡	渡横町 本郷		
三九	永井城跡	城跡	都治町 上都治	郭、堀切	城山城跡
四十	桑栄原城跡	城跡	川下		
四一	正羅寺城跡	城跡	南佐木		
四二	白地城跡	城跡	南佐木 白地		
四三	芦ヶ城跡	城跡	北佐木		
四四	土居城跡	城跡	田豫 上石		
四五	大元山城跡	城跡	三原 田豫・谷佳郷		
四六	高城跡	城跡	三原		
四七	古城跡	城跡	谷井郷 上谷	山城、削平地	岩根城跡、押手城跡?

3 石見銀山

名稱	種別	所在地	概要	備考
山吹城跡	城跡	大森 銀山	山城、石垣、窓	国指定
龜通寺留歩	城跡	大森 銀山		国指定
櫛神山留歩	城跡	大森 銀山		国指定
新橋留歩	城跡	大森 銀山		国指定
佐賀丸山神社	神社	大森 銀山 姫煙谷		国指定
トチ煙谷吹塵櫻留歩	城跡	大森 銀山		国指定地内
甘利御山坑跡	城跡	大森 銀山		国指定地内
組谷坑跡	城跡	大森 銀山		国指定地内
大潤守跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
大潤寺墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
順慶寺跡	寺院跡	大森 銀山	石垣、幽霊塚	国指定地内
宗家佐渡の墓	古墓	大森 銀山	天保12年建立	国指定地内、市指定
貞安寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
神宮寺跡第I寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
神宮寺横集落跡	集落跡	大森 銀山		国指定地内
西音寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
本経寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
本瑞寺墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
佛善寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
佛燈寺墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
坂口番所跡	番所跡	大森 銀山	石垣、溝	国指定地内
太鼓堂	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
雞籠寺間歩上墓地	墓地	大森 銀山	一石宝鏡印塔、一石五輪塔	国指定地内
楊梅谷吹歌跡	吹屋跡	大森 銀山		国指定地内
妙妙寺墓地	墓地	大森 銀山	「天正口年」銘宝鏡印塔	国指定地内
西門寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
西音寺墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
柳畠谷I集落跡	集落跡	大森 銀山		国指定地内
柳畠谷II集落跡	集落跡	大森 銀山		国指定地内
泉光寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
泉光寺墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
西音寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
西音寺墓地	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
柳畠谷吹屋屋敷跡	屋敷跡	大森 銀山		国指定地内
妙本寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
長福寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
妙本寺上墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
虎川寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
長良寺跡	寺院跡	大森 銀山		国指定地内
長美寺第I墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
長美寺第II墓地	墓地	大森 銀山		国指定地内
中野根馬塚跡	馬場跡	大森 銀山		国指定地内
戸見留歩	城跡	大森 銀山		国指定地内
石見銀山御料銀山町年寄山組 頭連宿高須家	民家	大森 銀山		県指定

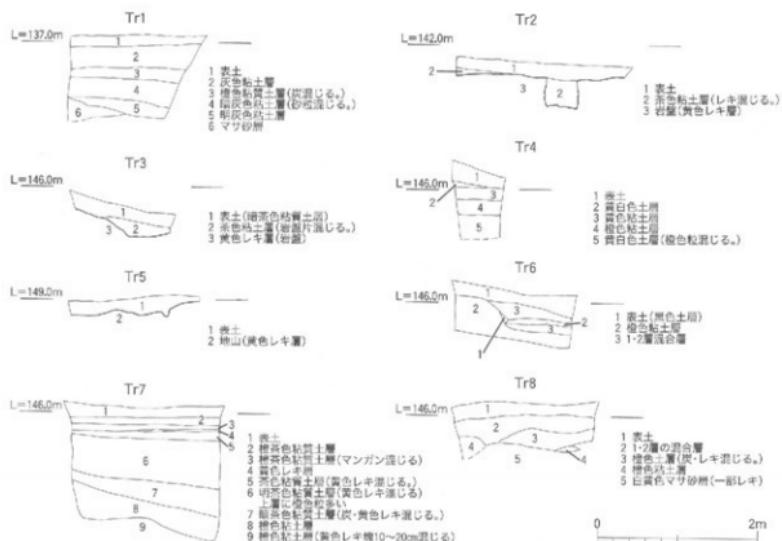
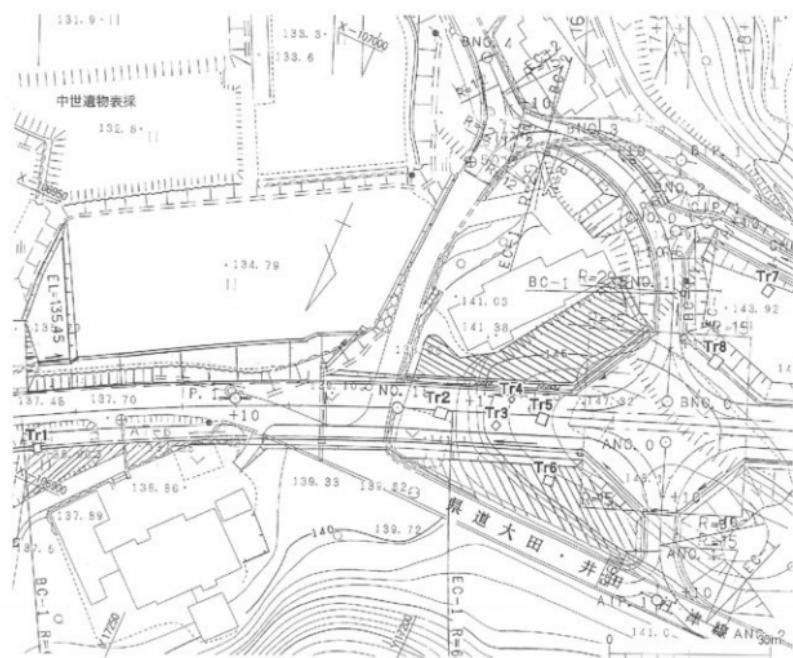
* 3 石見銀山は色アミ良いし、遺跡ポイントは地図には掲載していない。



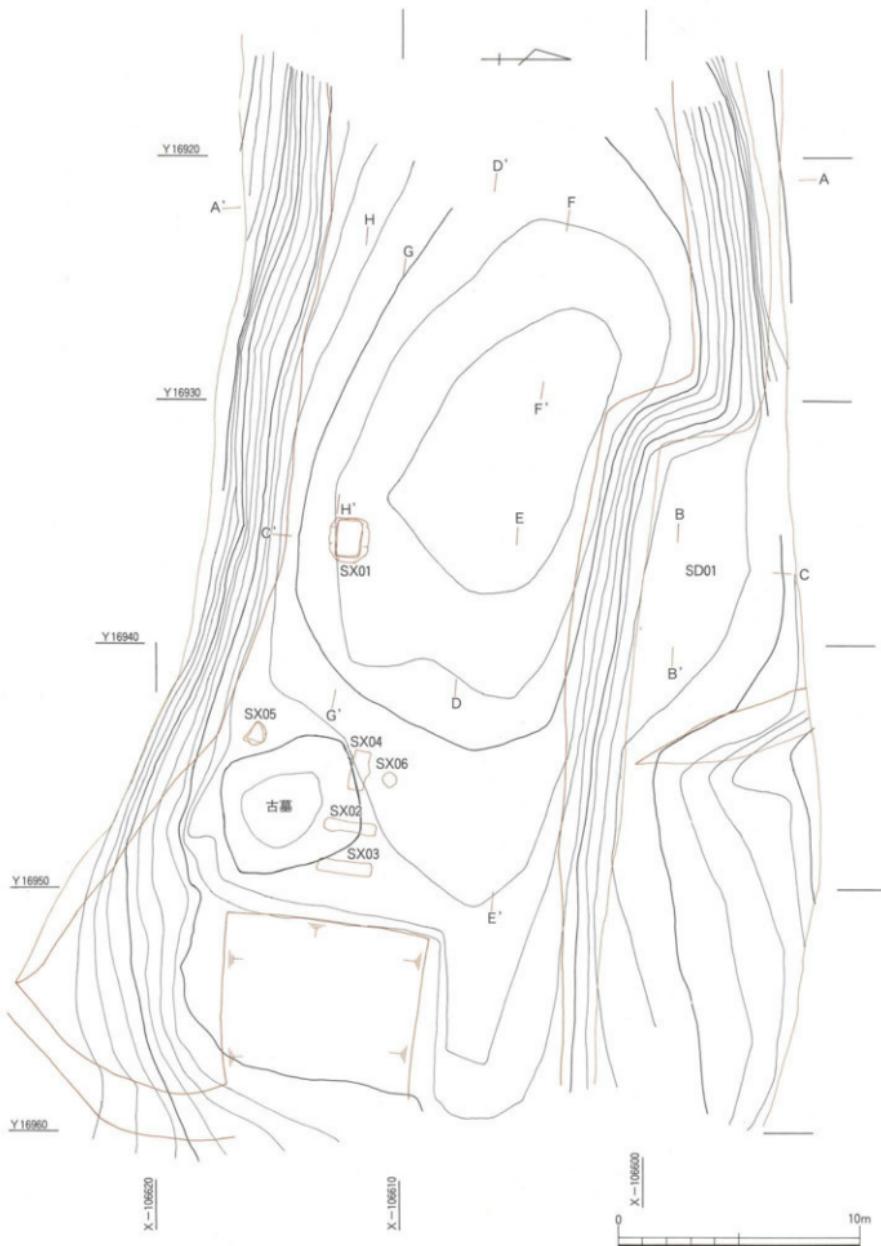
第3図 反坂遺跡周辺地形図 (S=1/20,000)



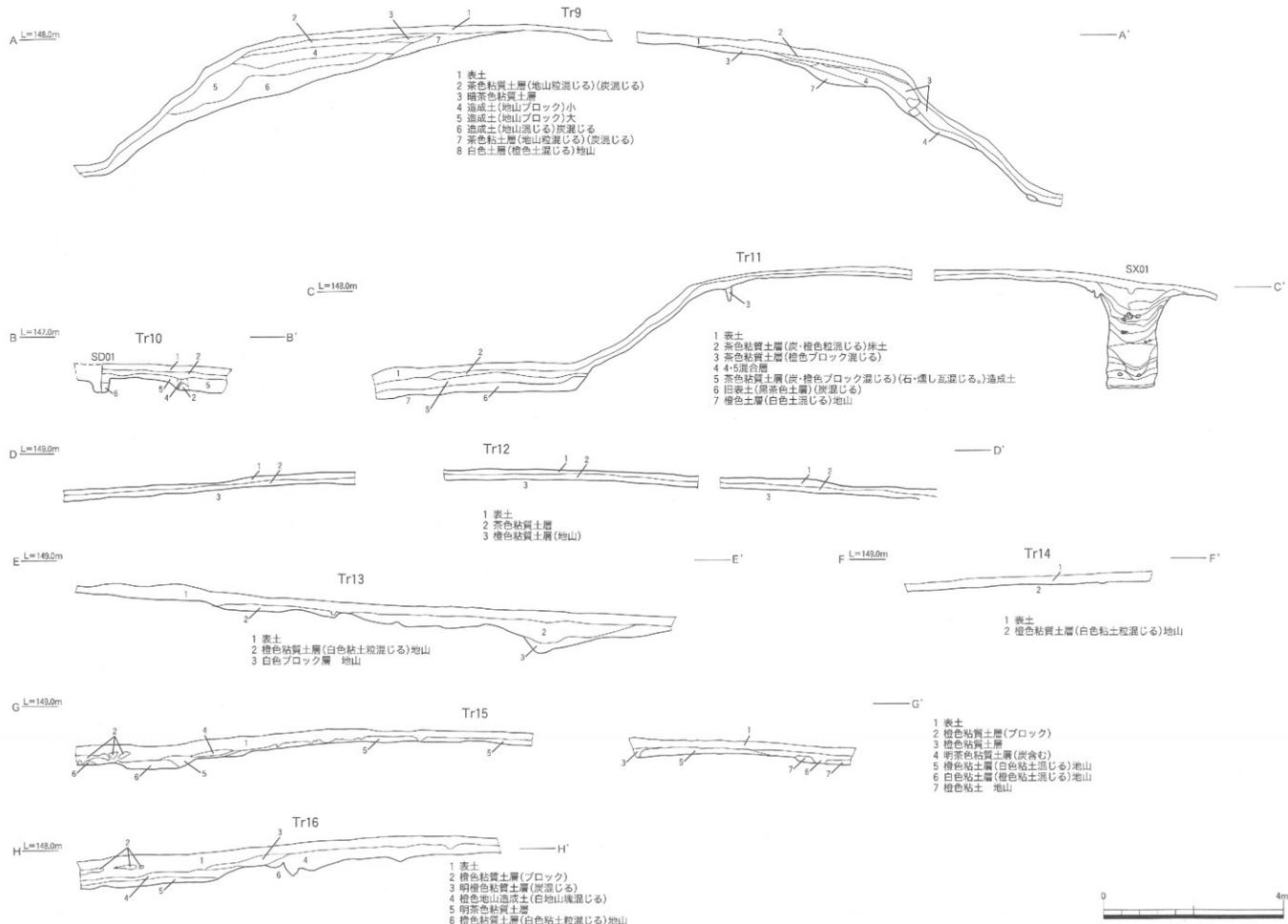
第4図 反坂遺跡周辺地形図 (S=1/5,000)



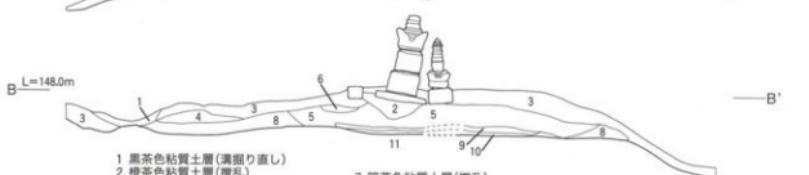
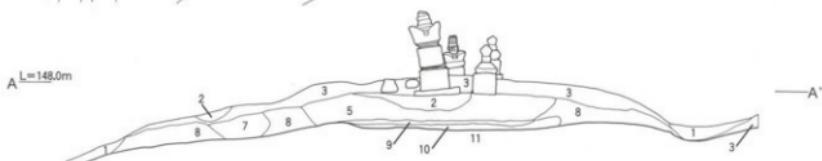
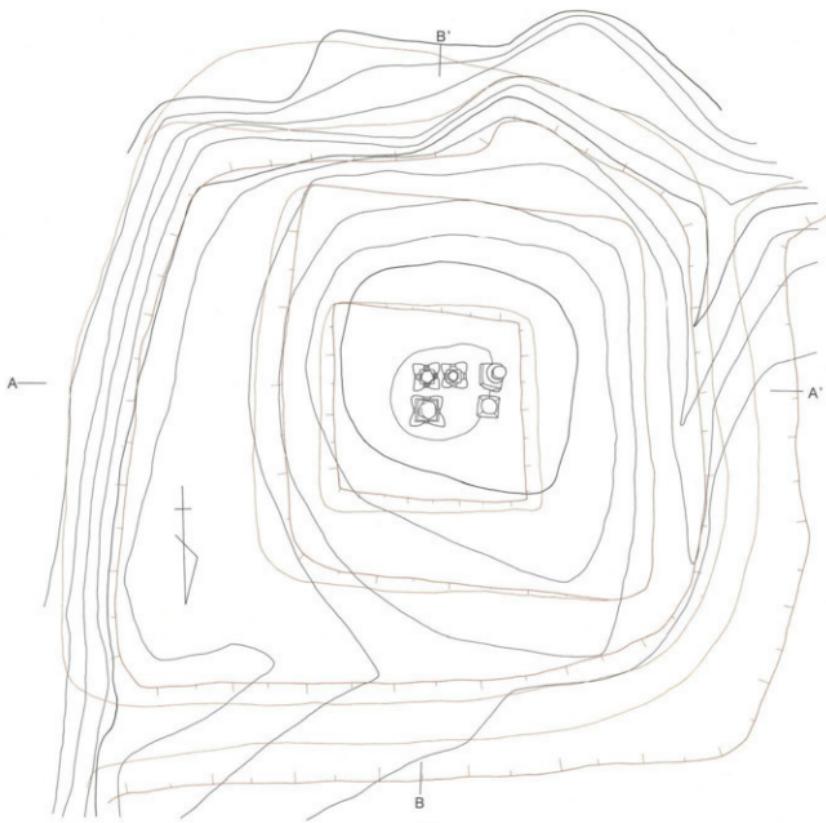
第5図 反板遺跡試掘調査トレンチ配置図 (S=1/900)・土層図 (S=1/60)



第6図 反坂遺跡遺構配置図及びトレンチ配置図 (S=1/200)



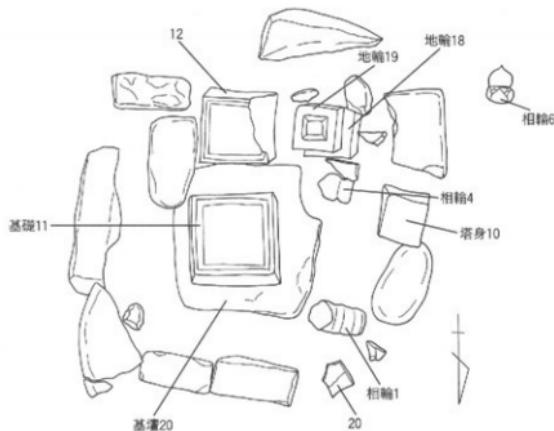
第7図 反坂遺跡調査区トレーンチ土層図 (S=1/80)



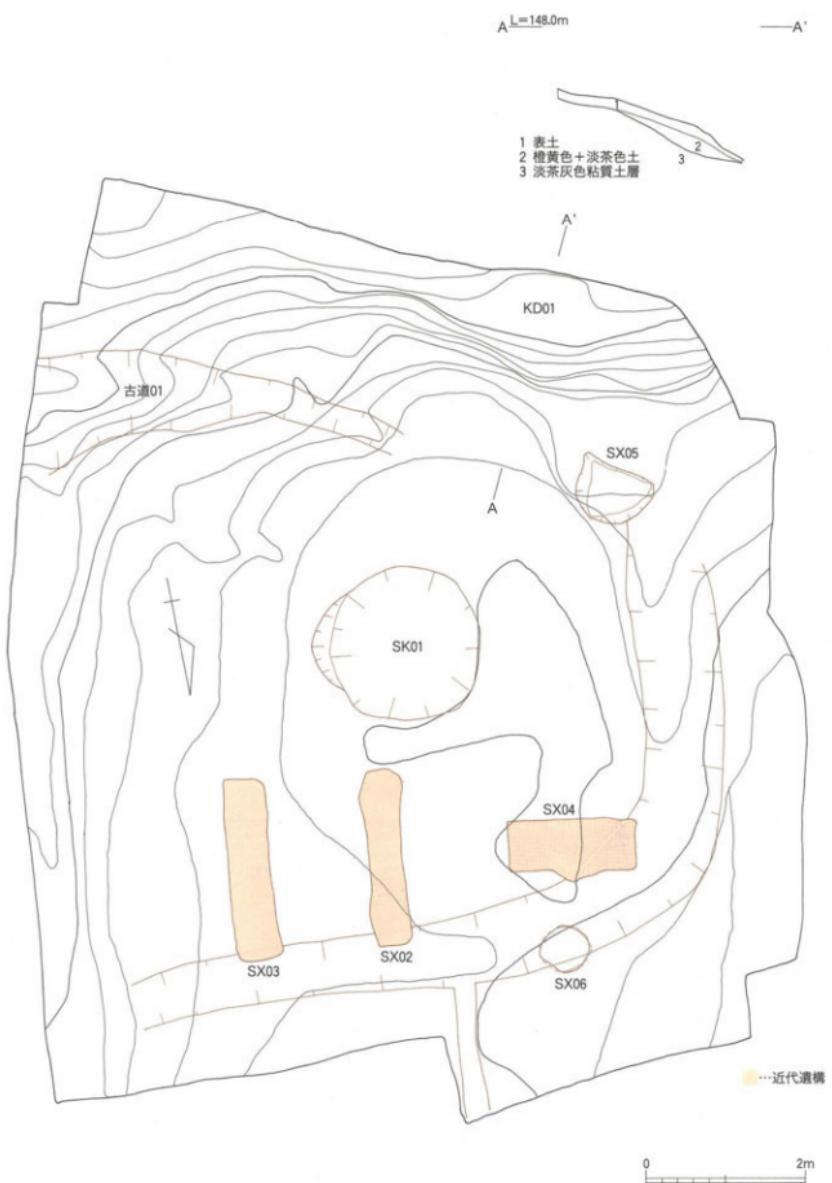
- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 黒茶色粘質土層(溝振り直し) | 7 暗茶色粘質土層(攪乱) |
| 2 橙茶色粘質土層(攪乱) | 8 淡茶灰色粘質土層 |
| 3 灰土 | 9 淡茶灰色粘質土層 |
| 4 灰土と地山粘土ブロック混合 | 10 橙黄色粘質土層(ブロックで入る) |
| 5 橙黄色粘質土層(地山ブロック含む) | 11 橙黄色粘質土層(地山) |
| 6 橙黄色+淡茶色土 | |

0 2m

第8図 反坂遺跡古墓調査前地形測量図・土層図 (S=1/60)

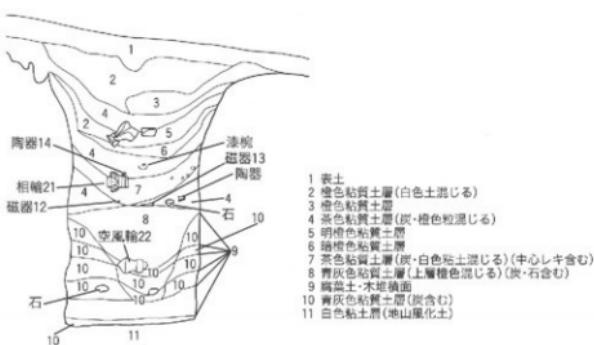
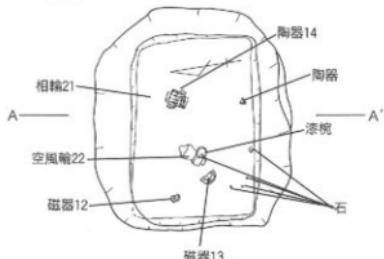


第9図 反坂遺跡古墓SK01 ($S=1/80$)・石塔下部配置図 ($S=1/20$)

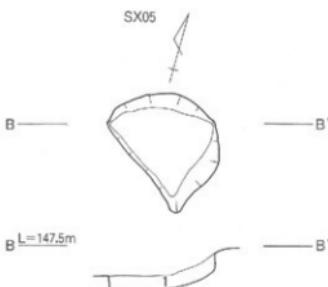


第10図 反坂遺跡古墓完堀地形測量図・遺構配置図 (S=1/60)

SX01



SX05



1 紫赤茶色土層(やや粘土質)(地山ブロック若干含む。)

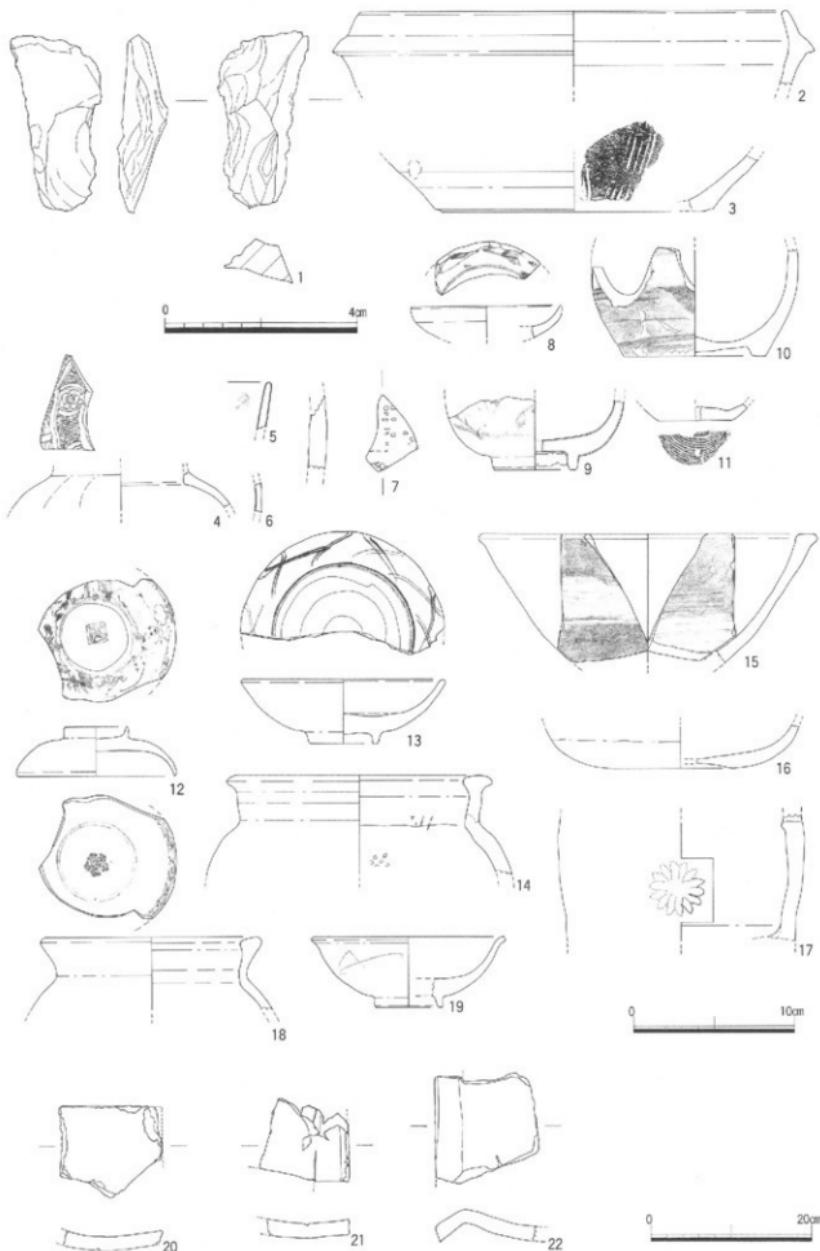
SX06



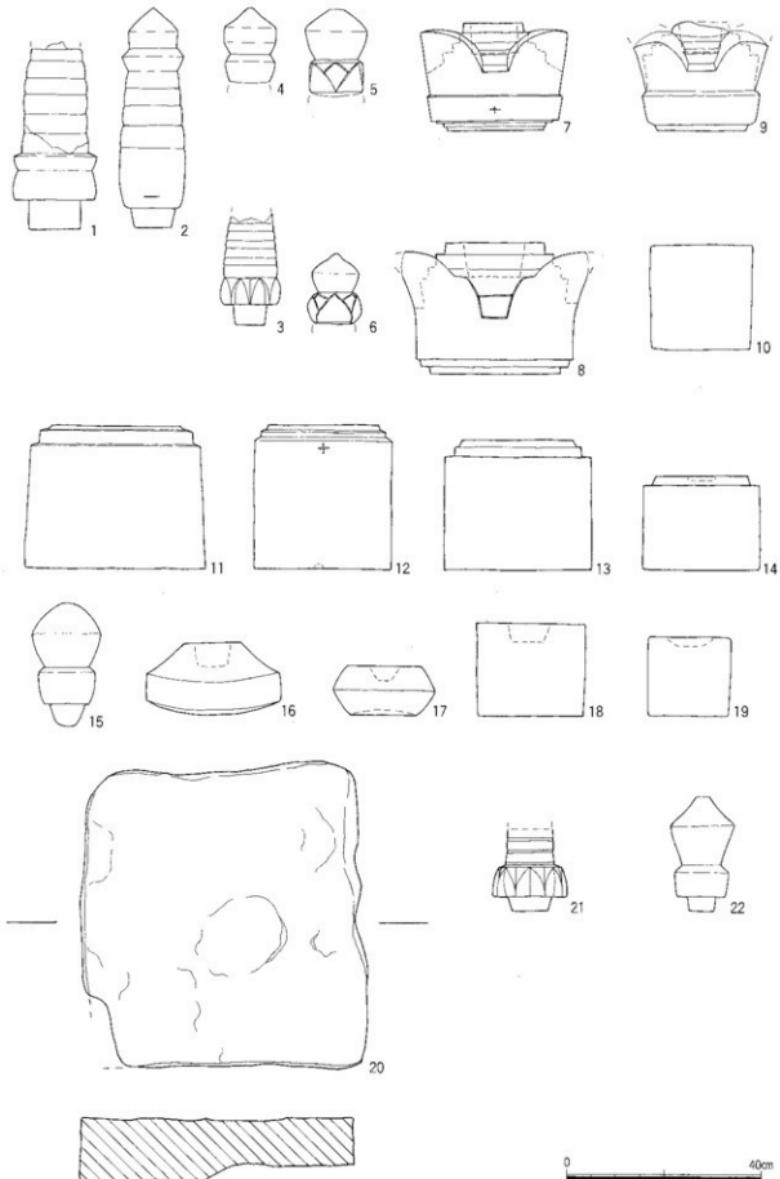
1 紫赤茶色土層(やや粘土質)(地山ブロック若干含む。)



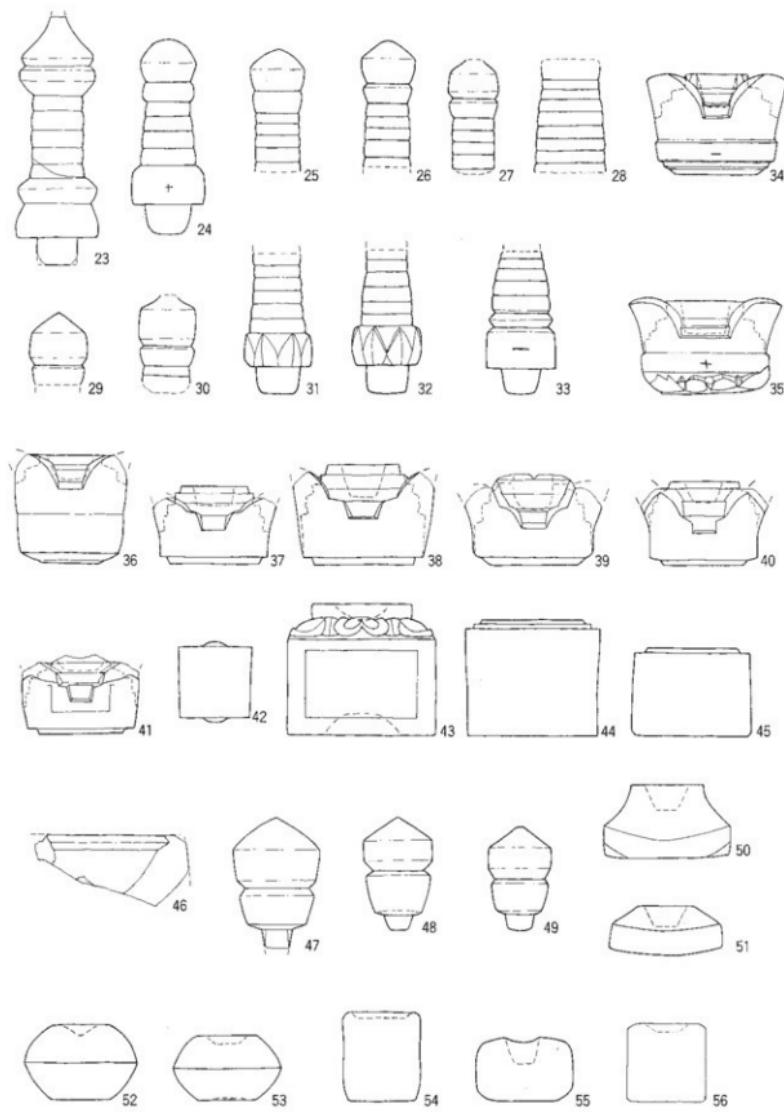
第11図 反坂遺跡SX01・SX05・SX06実測図 (S=1/40)



第12図 反坂遺跡出土遺物実測図 (S=1/1・1/3・1/6)



第13図 反版遺跡古墓・SX01石塔実測図 (S=1/10)



0 40cm

第14図 反坂遺跡寄せ墓石塔実測図 (S=1/10)

第2表 反坂遺跡遺構計測表

遺構名	上面形	長軸	短軸	深さ	主軸	出土遺物		備考
SX01	長方形	181	161	209	N-8° - W	陶器・磁器・焼瓦・焼土塊・漆椀・粗軸・空風輪		近世~
SX02	長方形	221	50	118	N-7° - E	陶器・磁器・鐵・柱		近代、火の見櫓
SX03	長方形	228	52	195	N-5° - E	陶器・磁器・鐵・柱		近代、火の見櫓
SX04	長方形	159	78	137	S-83° - E	鐵		近代、火の見櫓
SX05	楕円形	96	87	11	N-82° - W	磁器		近世~
SX06	楕円形	59	53	60	S-12° - E			近世~
KD01	-	約200	約150	約25	N-73° - W			近世~
古窯01	-	450	113		N-74° - W			近世~

単位(cm)

遺構名	上面形	盛土長さ	溝幅	溝深さ	主軸	出土遺物		備考
古窯	方形	588.5×609	120	12	64	一	陶器・磁器・土器・焼瓦・赤瓦・石塔片	近世~

単位(cm)

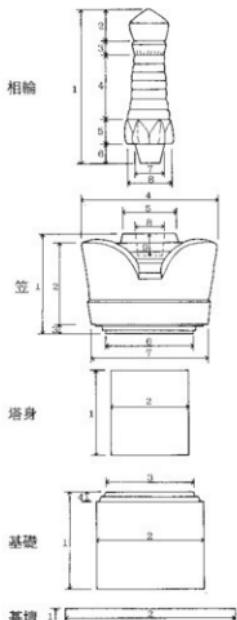
遺構名	上面形	長軸	短軸	深さ	主軸	出土遺物		備考
配石遺構	方形	148	125	-	N-8° - W			近世~

単位(cm)

遺構名	上面形	長軸	短軸	深さ	主軸	出土遺物		備考
SK01	円形	189	166	30	N-8° - E	陶器・磁器・焼瓦・不明土器		古墓中央で検出 近世~
SD01	-	500~	41	24	N-4° - E	焼瓦・灯明皿		近世~

石塔各部名称

宝篋印塔



宝篋印塔

相輪	1 全高 2 宝篋 3 上諸花高 4 下諸花 5 花済高 6 杖長 7 杖上部幅(往) 8 杖下部幅(往)
笠	1 全高 2 穴開き高+軒厚 3 下諸花
塔身	1 全高 2 幅
基礎	1 全高 2 下諸幅 3 上諸花の上部幅 4 上諸花高・反花座高
基盤	1 全高 2 幅
五輪塔	
空風輪	1 全高 2 宝篋 3 風済高 4 風済厚 5 風済幅 6 穴(上)幅 7 穴(下)幅 8 穴下部幅(往) 9 風済底
火輪	1 全高 2 軒厚(角) 3 軒済高 4 軒(上)幅 5 軒(下)幅 6 軒(下)幅 7 軒下部幅(往) 8 軒内深さ
水輪	1 全高 2 最大径 3 上諸幅 4 下諸幅 5 上部穴幅(往) 6 上部穴深さ 7 下部穴幅(往) 8 下部穴深さ
地輪	1 全高 2 幅 3 下部軒幅(往) 4 下部軒穴幅(往)

第3表 反板遺跡石塔法量表

単位(㎝)

回版	神國番号	部位	石材	形勢	筋六形	計測測点番号									備考	
						1	2	3	4	5	6	7	8	9		
12	1	相輪	石材C	円形	—	38.4~	—	—	22.9~	3.6~6.0	6	10.6	16.4	—	—	
12	2	相輪	石材D	楕円形	—	44.7	8.1	4.7	15.6	12.1	4.2	9	11	—	「—」が縫刻されている。	
12	3	相輪	石材C	円形	—	22.8~	—	—	13.1~	5.4	4.3	6.6	11	—	下説花は単弁と間弁で6箇、間に接続する。	
12	4	相輪	石材C	—	—	15.2~	9.5	5.7~	—	—	—	—	—	—	下説花は単弁と間弁それぞれ4箇。	
12	5	相輪	石材B	—	—	18.0~	10.4~	6.5	1.1~	—	—	—	—	—	下説花は単弁と間弁それぞれ4箇。	
12	6	相輪	石材B	—	—	14.4~	8	6.5~	0.4~	—	—	—	—	—	下説花は単弁と間弁それぞれ4箇。	
12	7	笠	石材D	—	円形	22.3	18.1~	2.2	27.4~	11	18.2	22.2	9	6.2	「+」が縫刻されている。	
12	8	笠	石材C	—	円形	27.0~	22.0~	3	37.0~	20	26.6	32	12.6	7	胸輪突起内側に段がある。	
12	9	笠	石材D	—	円形	22.1~	18	2	30.2	12.2	19.6	26	9.4	5.2	—	
12	10	塔身	石材D	—	—	21.4	20.8	—	—	—	—	—	—	—	地輪の可能性有り。	
12	11	基礎	石材C	—	—	29.2	37	26	4	—	—	—	—	—	階段状は高く造られる。	
12	12	基礎	石材D	—	—	29.4	28	22.6	3.2	—	—	—	—	—	「+」が縫刻されている。	
12	13	基礎	石材C	—	—	26.5	30.2	23	3.5	—	—	—	—	—	階段状は高く造られる。	
12	14	基礎	石材C	—	円形	19.2	24	19	2	—	—	—	—	—	階段状は一段	
12	15	部輪	石材D	円形	—	25.2	13.2	12	7.4	4.6	14	7	9	11.4	空・楕輪形は楕円形で空輪が大きく楕輪が小さい。	
12	16	火輪	石材D	—	円形	14.6	5.6	5.5	27	12	27.6	7.4	5	—	—	
12	17	水輪	石材D	—	四角形	10	21	15	13.4	6.4	3	13.4	1	—	—	
12	18	地輪	石材D	—	円形	18.7	22.2	8.5	3.6	—	—	—	—	—	—	
12	19	地輪	石材D	—	四角形	16.2	16.8	10.2	1.9	—	—	—	—	—	—	
12	20	基礎	粘板岩系	—	—	126	117	—	—	—	—	—	—	—	—	
12	21	相輪	石材C	円形	—	17.0~	—	—	7.5~	6.5	3	9	15	—	下説花の鏡面は2箇、間に隙縫がある。	
12	22	志頭	石材D	楕円形	—	23.5~	14.0~	9.5	6.5	3	13	5.6	9.6	11	空・楕輪形は楕円形で空輪が大きく楕輪が小さい。	
13	23	相輪	石材D	—	楕円形	50.8~	9.9~	6.2	17.1	5.0~7.0	5.6	8	16.8	—	宝珠が先継る。	
13	24	相輪	石材D	円形	—	39.8	8.7	4	13	8	6.1	9.6	14	—	「+」が縫刻されている。	
13	25	相輪	石材C	—	—	25.2~	8.5~	4.5	12.1~	—	—	—	—	—	—	
13	26	部輪	石材C	—	—	25.8~	8.8	4	13.0~	—	—	—	—	—	—	
13	27	部輪	石材C	—	—	23.5~	8.0~	4	11.5~	—	—	—	—	—	—	
13	28	相輪	石材D	—	—	23.0~	—	4.0~	19.0~	—	—	—	—	—	九輪が太い。	
13	29	相輪	石材C	—	—	14.8~	10.8	4.0~	—	—	—	—	—	—	—	
13	30	相輪	石材C	—	—	20.0~	10.5~	4	5.5~	—	—	—	—	—	—	
13	31	相輪	石材C	—	—	28.6~	—	—	16.2~	6.8	5.6	9	12	—	下説花の鏡面は2箇。	
13	32	相輪	石材C	円形	—	29.8~	—	—	16.0~	8	5.8	8.6	12	—	下説花の鏡面は8箇。	
13	33	相輪	石材D	円形	—	29.4~	—	—	12.7~	11.3	5.4	8	14	—	「—」が縫刻されている。	
13	34	笠	石材D	円形	円形	20.7	17.8	2.9	28.4	12.4	16.4	23.4	8	6.7	「+」が縫刻されている。	
13	35	笠	石材D	—	円形	19.6	15.2	4.4	31	16	17.6	18.5	10	6.6	上段部の平面形は直角に面をとる丸形。軒に「+」が縫刻されている。軒下は蓮弁が表現している。	
13	36	笠	石材D	—	異丸方形	22.1~	20.0~	2.1	23.0~	13	12	20	10.6	5	—	
13	37	笠	石材C	—	円形	16.0~	12.1~	1.5	25.0~	13.4	18.4	22	8.8	4	軒が厚い。	
13	38	笠	石材C	—	円形	20.5~	17.4	1.5	29.0~	14.6	20.4	24.4	9	6.6	—	
13	39	笠	石材C	—	円形	18.5~	12.5~	3	28.0~	10.6~	17.4	24.4	8	7	—	
13	40	笠	石材C	—	円形	17.0~	14.1~	1.5	26.0~	14	16.5	22	7.6	4.2	—	
13	41	笠	石材A	—	円形	16.0~	13.5~	1	24.0~	12.0~	17	22	9.4~	3.1	照磨突起内側に縫取りの次線が入る。	
13	42	塔身	石材B	円形	—	14.5	15	(5.0)	—	—	—	—	—	—	—	上下に浅い凹形の筋がある。
13	43	基礎	石材B	—	楕円形	26.8	30	20	4.8	—	—	—	—	—	—	反花座は間弁がある。下面に割り込みがある。
13	44	基礎	石材D	—	—	23.8	26.6	21	1.8	—	—	—	—	—	—	—
13	45	基礎	石材C	—	—	18	23.4	18.5	1	—	—	—	—	—	—	—
13	46	基礎	石材C	—	—	14.5~	31.5~	25.5~	3	—	—	—	—	—	—	—
13	47	部輪	石材C	四角形	—	26.5~	14.5	7.5	4.5~	17.6	6	12	15	—	空・楕輪形は楕円形で空輪がやや大きい。	
13	48	部輪	石材C	楕円形	—	23.2	11	12.2	8.5	3.7	14	6	9.4	13	空・楕輪形は楕円形で楕輪が大きさ。	
13	49	部輪	石材C	楕円形	—	21.2	10.7	10.5	6.5	4	12.6	6	9	11.6	空・楕輪形は楕円形で空輪がやや大きい。	
13	50	火輪	石材C	—	楕円形	15.1	6	3.7	25.6	14.6	25	9	5.2	—	—	
13	51	火輪	石材D	—	楕円形	10	5	5	22	11.6	23	9	4.1	—	—	
13	52	水輪	石材C	—	楕円形	15.5	23	12.6	12	—	8	2.3	—	—	—	
13	53	水輪	石材D	—	四角形	13.3	22	12	9	0.5	9	1.7	—	—	—	
13	54	地輪	石材D	—	—	18.4	16	12	1.2	—	—	—	—	—	塔身の可能性有り。	
13	55	地輪	石材C	—	楕円形	13	19.8	7.6	5.5	—	—	—	—	—	—	火輪・塔身の可能性有り。
13	56	地輪	石材C	—	四角形	16	16	9	1.6	—	—	—	—	—	—	—

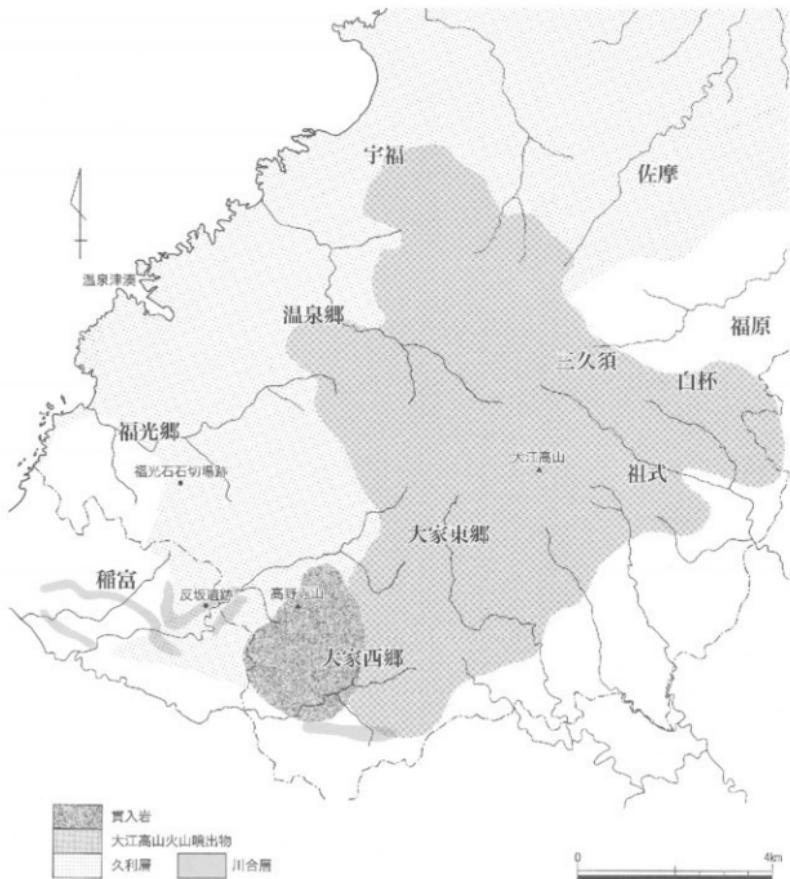
※石材の太字は中村氏に見て頂いた石落である。

第4表 反板遺跡出土遺物調査表

番号	出土地点	種別	器種	産地	時代	特徴	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	外側 灰色 0.1~0.5	内側 灰色 1.45	色調 灰色	断面 黒色	石材	サヌカイト
2 田園 (住居土)	表深 陶器	ごね鉢	器種	獨創	時代	口径 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	外側 灰色 0.1~0.5	内側 灰色 1.45	1次	施土	外壁 内面 鉢底	施瓦 施赤色 良好	
3 田園 (住居土)	表深 陶器	すり鉢	器種	獨創	中世	口横 (cm)	30	—	4.3~	17.2	3.5~	回転ナメ	暗灰色 鉢底	解赤色 良好	
4 5 古墳 (古墳上)	Sx01 施設	壺	器種	獨創	18世紀~ 18世紀?	口横 (cm)	—	—	—	—	3.0~	回転ナメ	青緑色 鉢底	解赤色 良好	
6 古墳 (古墳上)	壺	壺付水注	器種	獨創	14~15世紀	袖厚く崩れる。	—	—	—	—	—	—	—	—	
7 7 TS新削 (住居土)	壺	青磁	不明	織部系	16世紀~	外面部子目印き	—	—	—	—	4.3~	回転ナメ	青灰色 鉢底	解赤色 良好	
8 3層	壺	壺	壺	記前?	18世紀~	内面部文	—	—	—	—	2.0~	回転ナメ	名子目印き 密	赤灰色 鉢底	やや良 良好
9 Tr11 2層	壺	壺	壺	記前?	18世紀~	高台輪付壺	—	—	5	4.3~	回転ナメ	—	—	—	—
10 Tr11前壁 地山面上	壺	壺	壺	記前?	18世紀~	高台輪付壺	—	—	8.5	6.7~	金輪ナメ	—	茶色 茶色	赤色 茶色	良好
11 Tr11北壁 地山面上	壺	壺	壺	在地?	18世紀~	内面部ス付壺	—	—	4.4	1.0~	回転ナメ	—	茶色 茶色	茶色 茶色	良
12 Sx01 4層	壺	壺	壺	記前	1700~1780年代	見込み・輪花・五瓣花 高台・三重万形輪高輪	9.7	10	—	3.05	回転ナメ	—	—	—	—
13 Sx01 4層	壺	壺	壺	記前	1700~1780年代	見込み・蛇文 外面部輪	12.4	12.7	4	4	回転ナメ	—	茶色 茶色	土灰釉 茶色	良好
14 Sx01 7	壺	壺	壺	記前	18世紀~	内面部子目印き	15.4	—	—	6.2~	回転ナメ	—	—	—	—
15 Sx01上層	壺	壺	壺	記前	18~19世紀	内面部輪毛目	20.4	—	—	8.0~	回転ナメ	—	茶色 茶色	茶色 茶色	良好
16 Sx01中層	壺	壺	壺	記前	19~20世紀	口縁部部品取付輪	—	—	8.4	2.6~	回転ナメ	—	米色輪 茶色	茶色 茶色	良好
17 Sx01上層	瓦質土器	火钵	火钵	在地?	18世紀	内面部輪毛目	—	—	—	7.4~	回転ナメ	—	—	—	—
18 Sx02	陶器	壺・瓶	壺・瓶	在地?	19~20世紀	口縁部少しつぶみ出る。	—	—	—	4.65~	回転ナメ	—	やや密 密	米色輪 茶色	茶色 良
19 Sx05	壺	壺	壺	記前	18~19世紀	外底部少しつぶみ出る 高台輪付壺	11.8	—	4	4.4	回転ナメ	—	—	—	良好
20 古墳 (古墳上)	瓦	焼物瓦	器種	獨創	19世紀~	房の裏に記入する。	—	—	1.0~	1.05	1.0~	施土	外壁 内面 鉢底	黑色 白色 黑色	施瓦 施赤色 良
21 古墳 (古墳上)	瓦	焼物瓦	器種	獨創	19世紀~	表裏工具によるナメ・印き	10.4~	—	11.1~	1.8	—	ナメ・印き	やや密 少しあわせた 鉢底	黑色 白色 黑色	良
22 Sx01下層	瓦	焼物瓦	器種	獨創	19世紀~	表裏工具によるナメ・印き	13.3~	—	12.9~	—	—	ナメ・印き	茶色 茶色	白色 白色	良

第5表 反坂遺跡遺物分類表

場所	時代	名称	個数	場所	時代	名称	個数	
古墓	14世紀	青磁	1	Tr9	近世	磁器	5	
	18世紀	青磁	1		陶器	2		
	18世紀～	陶器	1		瓦	3		
	19世紀～	瓦	2		近代	磁器	2	
		磁器	30			陶器	1	
	近世	陶器	16			須恵器	1	
		瓦	15			土師器	1	
	近世？	陶器	3			焼土塊	14	
	近世～	瓦	12			磁器	2	
	近代	磁器	12			陶器	2	
	近代（現代）	陶器	1			铁滓	3	
SK01 盛土		土器	3	Tr10	不明	陶器	1	
		磁器	13		18世紀	陶器	1	
		陶器	6		18世紀～	土師器	1	
		石塔片？	2			陶器	1	
		鉢器	1			磁器	1	
盛土上面 古墓付近	18世紀～	磁器	1	Tr11	近世	陶器	1	
	近世	陶器	1			瓦	3	
	近世	磁器	1			陶器	1	
	近代	瓦	1			瓦	1	
	近世	陶器	1			19世紀～	陶器	1
古墓付近	近世？	陶器	1			近代	磁器	4
	近代	磁器	1			不明	土師器	2
	不明	陶器	2			中世	土師器	2
		18世紀	瓦質土器	1		18世紀	陶器	1
		1700～1780年代	磁器	2		近世	瓦	1
SX01		土器	1		磁器	1		
		陶器	2		陶器	1		
		瓦	1		燒土塊	1		
		19～20世紀	陶器	1		磁器	3	
		磁器	3		陶器	4		
		陶器	1		磁器	3		
		瓦	13		土師器	1		
		木製品	2		磁器	2		
		磁器	1		瓦	1		
		燒土塊	2		磁器	1		
SX02		石塔片	1		近代	磁器	3	
		土器	1		瓦	1		
		磁器	1		磁器	1		
SX03		陶器	1		陶器	1		
		19世紀	陶器	1		近代	磁器	1
		近世	磁器	3		磁器	1	
SX05		近代	磁器	1		陶器	1	
		18世紀～	磁器	1		瓦	5	
総計			170		陶器	1		
田園					磁器	8		
					陶器	4		
					瓦	5		
					陶器	1		
					磁器	10		
					陶器	1		
					石器	1		
					磁器	1		
					陶器	3		
					磁器	7		
廐土					土器	1		
					磁器	2		
					陶器	2		
					磁器	1		
総計			130					



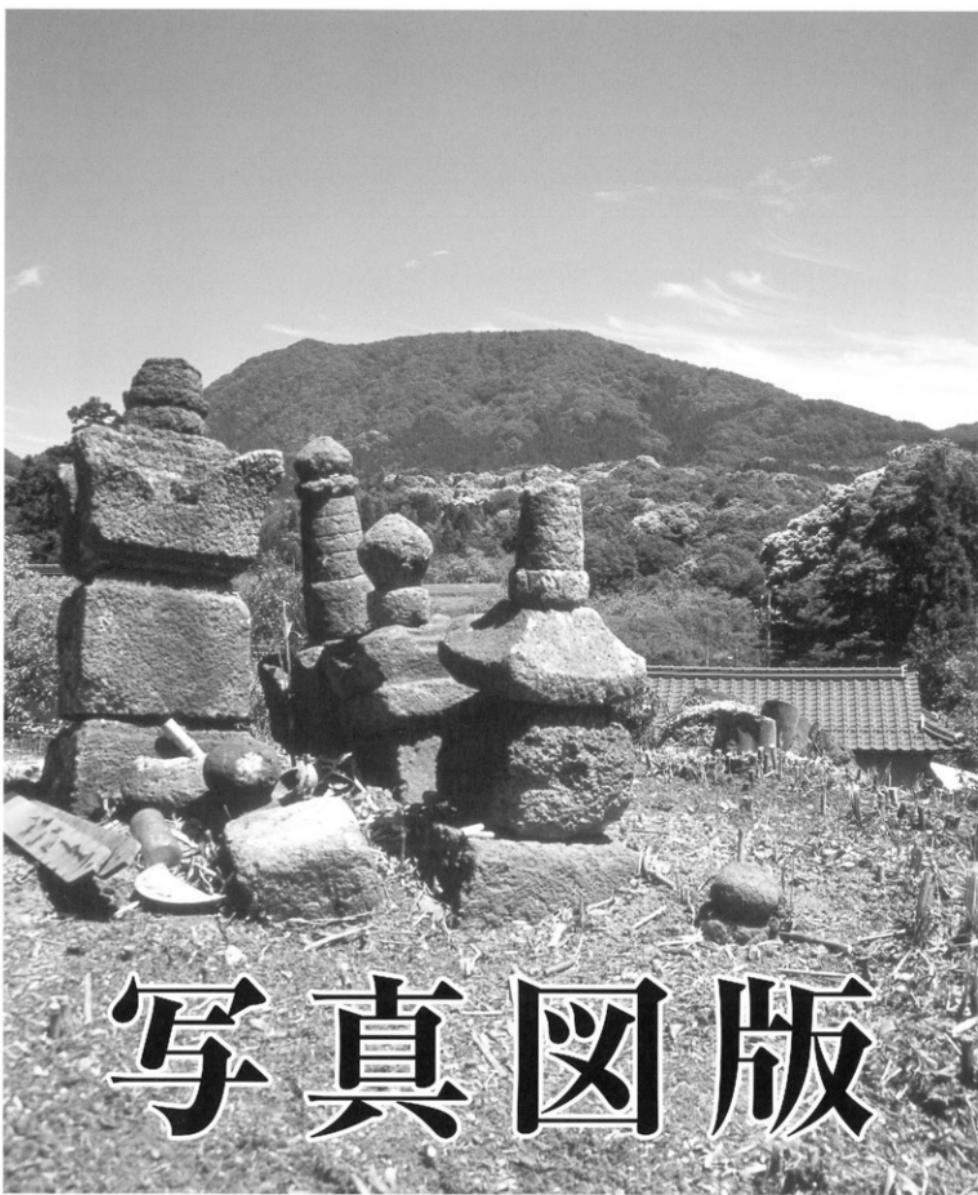
第15図 中世大家荘基本所領図及び地質図 (S=1/100,000)

第6表 地質及び岩石表

地質名		岩石名
大江	大江高山山系	内輪高閃石帶テサイト岩帶
火	鍋山火口・東北壁	角閃石雲母テサイト・石質火口壁
山	三久須小山火口噴火	角閃石雲母テサイト・石質火口壁
噴	失瀬火口・火口壁等	角閃石雲母テサイト・火口壁
出	川上火口岩柱火口	角閃石雲母テサイト・火口壁
場	大家火口・火口壁等	角閃石雲母テサイト・火口壁
大	門前火口・火口壁等	角閃石火口・火口壁
家	大家火口・火口壁等	角閃石雲母テサイト・火口壁
荘	千王洞	角閃石合鳴雲母テサイト・洞窟
主	千子谷	角閃石合鳴雲母テサイト・洞窟
領	千子谷大山山頂	角閃石雲母テサイト・山頂火口
實	実入岩	ドレーライト・火口・火口壁
入	走石	テサイト
久	走石	テサイト
列	火口壁等	火口壁等
層	火口火口壁等	火口火口壁等
川	火口壁等	火口壁等
合	砂岩	砂岩
層	砂岩	砂岩

第7表 中世大家荘の領域とその内部単位組織表

基本所領(庄・郷)	内部単位(村)	現在	基本所領(庄・郷)	内部単位(村)	現在
温泉郷	源井	—	久利層	—	大田西
	西田	—	三久須	—	
	高野	—	当社	—	
	高野	—	堀畠	—	
	塩	—	堀畠	—	
	上村	—	田原	—	丹智野町・日本町
施主層	下村(河下)	—	谷	—	
	本分	—	住郷	—	昌谷郡施江町
			佐野	—	
			連泉	—	
			井戸	—	
			井田	—	温泉津町
			横山	—	
			横道	—	
			宇都	—	
			馬路	—	仁原町
			神津	—	
			吉浦	—	
			吉浦(振替?)	—	温泉津町
			今浦	—	
			波狭	—	江寧市



写真図版

写真図版1



高野寺山から波積地区を望む。(右に反坂遺跡) E→W



高野寺山から反坂遺跡を望む。SE→NW



反坂遺跡遠景 SE→NW



温泉津町市境から反坂遺跡 E→W

写真図版3



古墓調査前状況 E→W



伐開後調査区 E→W



調査前石塔配置状況 NW→SE



調査前石塔配置状況 SW→NE



石塔下部配置状況 N→S



Tr9北側土層堆積状況 N→S



Tr9南側土層堆積状況 W→E



Tr9南側土層堆積状況 W→E



Tr9北側土層堆積状況 W→E



Tr11SD01 S→N

Tr11SD01 N→S

写真図版5



Tr16土層堆積状況 W→E



Tr12土層堆積状況 W→E



Tr16堆積状況 SW→NE



Tr16土層堆積状況 S→N



Tr14土層堆積状況 S→N



古墓表土除去（SK01プラン検出）NW→SE



古墓表土除去（SK01プラン検出）NE→SW



石塔配置状況（第9図）N→S



石塔配置状況（第9図）S→N



基壇検出状況 NW→SE



基壇取上げ状況 N→S



SK01完堀状況 NW→SE



SK01完堀状況 NE→SW

写真図版7



古墓W-Eセクション土層堆積状況（第8図）N→S



古墓W-Eセクション土層堆積状況（第8図）N→S



古墓W-Eセクション土層堆積状況（第8図）N→S



古墓N-Sセクション土層堆積状況（第8図）W→E



古墓N-Sセクション土層堆積状況（第8図）W→E



SX01検出状況 NE→SW



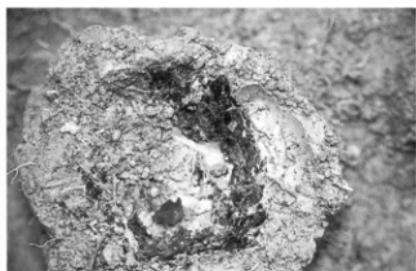
SX01遺物出土状況（第11図）W→E



SX01相輪出土状況（第11図）W→E



SX01漆椀出土状況（第11図）N→S



SX01漆椀出土状況（第11図）N→S

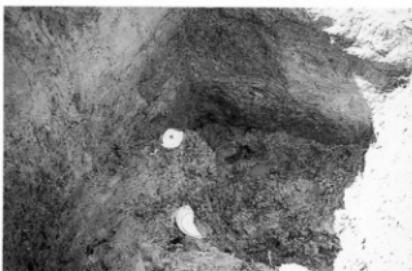
写真図版9



SX01土層堆積状況 W→E



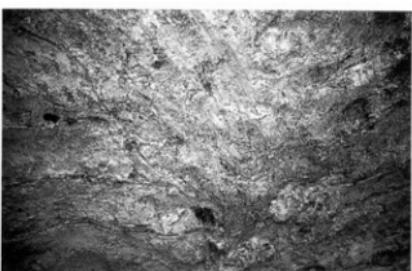
SX01土層堆積状況 W→E



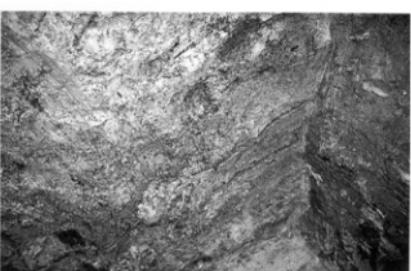
SX01磁器出土状況 SE→NW



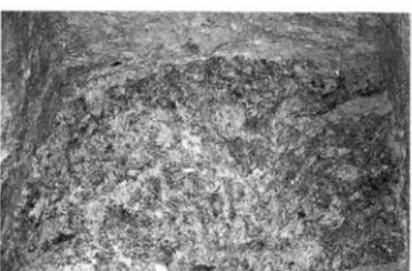
SX01土層堆積状況 W→E



SX01土層堆積状況 W→E



SX01土層堆積状況 W→E



SX01完掘状況 S→N



SX01完掘状況 W→E



古道01・KD01完堀状況（第10図） E→W



古道01・KD01完堀状況 W→E



古道01 E→W



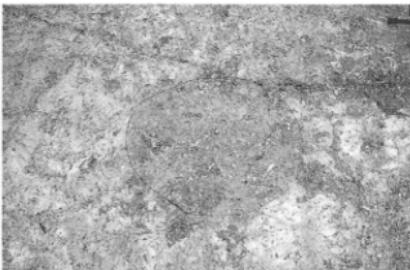
N-Sセクション土層堆積状況 W→E



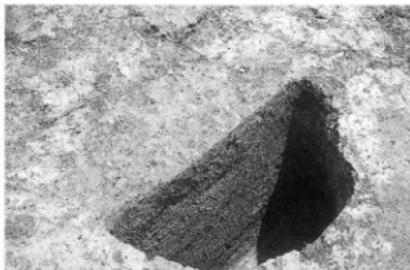
N-Sセクション土層堆積状況(第10図) W→E



SX05土層堆積状況 S→N



SX06プラン検出状況



SX06土層堆積状況



SX06完堀状況



古墓完堀状況 W→E



遺構完堀状況 NW→SE



遺構完堀状況 NE→SW



作業風景 NW→SE



現地説明会



古墓 宝篋印塔 (1・8・13・11)



古墓 宝篋印塔 (3・9)



古墓 宝篋印塔 (2・7・12)



古墓 宝篋印塔縹刻マーク (2・7・12)

写真図版13



古墓 五輪塔（15・16・17・19）



古墓 宝篋印塔相輪片（6）



古墓 宝篋印塔相輪片（5）



寄墓全景 W→E



寄墓全景 S→N



寄墓全景 N→S



ポイントA墓地（第4図）



ポイントA寄墓（第4図）



ポイントA宝篋印塔（第4図）



ポイントA宝篋印塔（第4図）



ポイントA石仏（第4図）



ポイントA五輪塔（第4図）

報告書抄録

ふりがな	たんざかいせき						
書名	反坂遺跡						
調書名	都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に伴う発掘調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番							
編著者名	梅木 茂雄・澤津 勉						
編集機関	江津市教育委員会						
所在地	〒695-0011 烏根県江津市江津町1525 TEL 0855-52-2501						
発行年月日	西暦2005年3月31日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 道路番号	北緯 °・'・"	東経 °・'・"	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
たんざかいせき 反坂遺跡	じまねけん こうづし 鳥根県 江津市 はづみちょう ほんごうあさぎ 波積町 本郷字 たんざか 反坂	32075	-	132°21'20" 35°57'54"	20050401 ~ 20050731	1,177m ²	都治川治 水ダム建 設（波積 ダム）に 伴う調査
所取遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
反坂遺跡	古墓	中・近世	古墓	宝鏡白塔・五輪塔・ 陶磁器・陶器・漆椀			

反 坂 遺 跡

都治川治水ダム建設事業（波積ダム）に伴う
発掘調査報告書

発行 2006年3月

編集 江津市教育委員会
鳥根県江津市江津町1525

印刷 有限会社 原 印刷